五百圓丈ではどうにもならない。その時龜屋の上田支配人のお話しで、伊勢の鈴木と云ふ家に養子に行くことになつてその養子先から一千圓也の金を借り、都合千五百圓也を資本にして、虎の門近くの芝區琴平町二番地に、家賃三十圓也の家をかりて、いよ〳〵不二屋號の下に、食料品店を開くことに辿りついた。

千五百圓の資本、内約五百圓程が家の造作變に、その他こま〴〵したものに二百圓程、八百圓のストックをもつて、多大の希望の下に開店したのであつた。資本が少なく、ストックを多く見せる爲には、カラ瓶を上手に飾つて、外見を張る事等色々の苦勞があつたが、私の張り切つた元氣も、てもなく、吹飛ばされて悲境のどん底につき落される事が起つた。

世の若き獨立希望者に

と云ふのは、開店日は友人知己等のお祝と云ふ譯で、幸ひにも二十七圓の賣上があつた。その翌日には何と云ふ悲慘ではないか、僅かに一圓五十錢の賣上に過ぎなかつたと云ふ有樣であつた。

開店さへすれば、一日三十圓四十圓の賣上は譯もなくあるものと信じてゐた、その自信の前に、殘酷にも一日の賣上一圓五十錢也と云ふ、動かすことの出來ぬ事實を見ては、深い絶望の淵に立つた感があつた。

大商店に長年勤めてゐると、その店の長い歷史と信用と資本と、幾多の要素が綜合されて、譯もなく賣れて行く有樣になれて、店さへ持てば事なく賣れて行くと云ふ輕薄な夢にまどはされて、そのよつて來る原因に就て、深い觀察を欠いてゐた自己の愚さを。つく〴〵と淋しくなつたのであつた。

その上、原料の仕入に就ても、龜屋さんにゐる時取引のあつた卸商に、交渉さへすれば一ケ月程のかけ賣はして呉れるものと信じてゐた。

處が、その自信も根本からくつがへされた。卸商から車に商品を積んで、店の前に來ても、現金と交換でなかつたならば、車から商品を下さうとさへしないのではないか、昨日までは長年の龜屋にゐたなじみによつて、相當信用して呉れるものとのみ一途に思つてゐた。それも皆自惚であつたのか、社會と云ふのは、さう簡單に出來上つてゐないことを、まざまざと見たのである。

兎角大商店に勤めて、後獨立開店するにあたつて、蹉跌の多いのは、之の邊にその原因があると思ふのである。

背水の陣をひいて

斯くして、その年は、二百五十圓の賣上げに過ぎずして、暮れて逝つてしまつた。

私は『自分は教育もない、智識もない、若もこの食料品店がこのまゝ失敗に終つてしまつては、自

分は道路人夫か、土方になるより他はない、死者狂になつても此店を守らなくてはならぬ』と、背水の陣を布いた。私には一月一日もなかつた。早朝から、店だけの賣上ではとても駄目だと、覺つたので、遠く郊外までも御用聞にまはつた。一日、二日、三日と毎月私は朝六時から夜晩くまで、得意先の開拓のために夢中になつて活動した。

一月の賣上は五百圓となつた。二月の賣上は六百圓となつた。背水の陣の奮闘は毎月メキ〳〵と顯著にその營業成績の上に反映して行つた。

その中夏となつた。中流以上の家庭に於ては、ドシ〳〵海に山にと避暑に出かけて行く人が多くなつて行く一方だ。私はその間得意客を失ふ損失をおぎなふ爲に、又は新たな得意客を作るために、輕井澤の避暑地にささやかな店を開くことにした。その時も多くの競走者が出たが結局背水の陣の意氣は强かつた。

その結果は良好だつた。第一に私の目的通りに、從來の華客との取引を幾分つなぐことが出來たし、避暑地に於て、新しい得意客を得て、九月になつて皆んな東京に引上げても、續けて取引をして戴くことが出來る樣になつた。

店員には獨立をさす樣に

店が次第に賣上げを增して行くに從つて、自分一人ではとても手が廻るものではなく、次第に三人、四人、十人と店員を增して行つた。

私は自分の小店員であつた經驗から、店員には出來るだけ獨立の機會を與へてやる樣に心掛けた。自分一人が逆立ちになつてみても店員一同が協力して心から働いて呉れなくては、店は繁榮するものではない。

しかるに、店員が協力一致して、店のために働いて呉れるには、或る目的を持たさなくては、出來るものではない。卽ち小店員の望んでゐる獨立の機會を與へる——目的を、出來るだけ實現さすやうに、努力してやらなくてはならぬと考へた。

十年間勤めた者が自分の貯蓄と——私の店では今、月給の中から五圓丈しか現金を與へない、殘りを皆んな貯金させる事にしてゐる。衣服も春秋二季に與へるし、內湯もあり、小使は五圓で足りる——店の援助とによつて開店してゐる者が今では横濱、大森、麻布、伊勢、鎌倉の五ケ所にあるが、その前例をも見聞してゐるので、店員は皆んな精勵して呉れる。

私は之の共存共榮の道が、昭和の商人道ではないかと思つてゐるのである。

傑物か！　怪物か？　須田町食堂主

震災が生んだ新現象として擡頭した幾多の現象のうちで、所謂民衆食堂なるものこそ、東京に於ては蓋しその最も著しいものであらう。而もその食堂界の一角に起つて、僅々三百圓の資本を以て烽火を揚げ、開業後三年にして市内に十二の營業所を開き、今や正に震災後の東京の一名物たらんとしつゝあるまでに發展せしめた主人公、加藤清二郎君とは果して如何なる人物かまた彼が如何にして今日の發展を致したか。

未だ三十歳の弱年にして既に幾浮沈を有する彼の前半生、而して身を以て進んで艱難に衝り、堂々とこれを切拓いて行くその闘志、時代の風潮を察してこれに適應する彼の着眼、單に興味とのみ云はず、われらに敎ふるところ多いことを信ずる。

學校は不要だ

『君の家が、君を學校へ出せぬほどの貧乏人ぢやなし、せめて中學位でもやつたらどうだ』

先生は頻りに少年を說いたけれども、何か心に期するところあるかして、少年は先生の勸めを肯かうとはしなかつた。父親もどちらかと云へば學校へ入ることに贊成してゐたのだつたが、少年は遂にきかなかつた。そして商業見習のために、小學校を出ると直ちに新潟の某海產物商會に小僧として住み込んだ。これがわが加藤清二郎君の社會に乘り出した實に第一歩であつた。

それは凧合戰で有名な新潟縣中蒲原郡白根町、これが加藤清二郎君の鄕里である。彼はその町の材木商加藤清作氏の次男として、明治三十一年四月八日に生れた。稚さい時からなか〳〵のきかん坊で、負けることが大きらひであつた。そして十から十四五歳位までは、近所の子供達の我鬼大將として、相當の暴威を逞ふしたものであつた。

だが愈々小學校を終らうとして、少年ながらもその身の前途を考へた時、彼には既に確乎たる方針が定まつてゐた。彼はいつぞや雜誌で讀んだ故安田善次郎翁の說を記憶して居た。それは實業界で大いに成功しようと思つたら學校などは要らぬ。早く實社會にとび込んで、實地について叩き込まなければ駄目だといふのである。彼はこれを無條件に肯定した。そして父や敎師の勸告を拒けて、自ら選んだ道に突き進んだのであつた。

早くも盛衰一浮沈

彼は新潟で二年ばかり働いたが、人間は早く大人になつて早く仕事を始めなければ駄目だと痛感し、十八歳の年志願して村松歩兵第三十聯隊に入

營したが、在營二年間に於ても、彼の負けじ魂は、最もよく發揮せられ、皆自分よりも年上のものみを向ふに廻して、學科に於ても動作に於ても常に彼等の上に出て、六百數十名の同年兵中一番の成績で除隊した。

時は大正七年、恰も世界大戰の末期に當り、景氣は天井知らずで、株式熱は彌が上にも高まつてゐた。彼も男兒事を成すはこれにありとなし、直ちに上京して友人の經營してゐる某株式店に入り、二十一歳から二十四歳まで四年間、機敏と大膽とを以て縱横に活躍し、其のため店にも少なからぬ利益を齎らし、自分も巨富を作り、一時は隨分豪奢な生活を營んで得意になつてゐた。

しかし不自然な榮華はいつまでも續くものではなかつた。大正九年、戰後の大恐慌に際會して、彼は大敗して全く無一文の元の杢阿彌となつて了ひ、詮方なく鄕里の實家へ歸つて靜養してゐた。

ところがその年の七月、尼港慘劇事件に基いて我國が、露領沿海州、サガレンの地を軍時占領したので、そのために彼の地は異常な活況を呈した。彼の鬱勃たる野心は再び頭を擡げ、

『よしつ、サガレンに押渡つて新天地を開拓しよう』

と決心し、大正十年四月サガレンに渡つたが、然し時既におそく、どこを探しても儲け口など一つも轉づては居ず、遂に止むなく土工の仲間に入り、きのふまでは、おかひこぐるみであつた身を法被に包み、鶴嘴を把つてこゝに半年の間馴れぬ勞働に骨を碎いた。

熟々相場の非を悟る

半歳のサガレン生活によつて彼は五百圓の貯蓄をすることが出來た。

この五百圓の貯蓄こそ眞に血と汗とによつて生み出された、この上もなく尊いものでなければならない。然るに彼はその五百圓を何に使つたか。彼はまだ數年前の成金時代の甘い夢が覺めずに居たのであつた。彼はその儚ない夢を追つて再び相場に手を出し、一週間のうちに五百圓の全部を失つて了つた。彼はこの時初めて自分の考への誤つて居たことを悟つたのである。

『相場なんかに手を出すものぢやない。以後はプツツリ止めよう。そして堅實な實業に精進しよう。』

彼は全く新たなる心を以て上京した。それは大正十一年四月十一日、英國の皇太子殿下御入京の前日であつた。その時彼の胸に溢れた希望は、『堅實な商人たらんこと』であつた。そして先づ如何なる職業を選ぶかについて種々考へて見た。

菓子屋の配達夫となる

彼は職業を選ぶ上に三つの標準をおいた。その第一は彼が在營中習つた劍術の極意を思ひ出し、商賣成功の要諦は先づ敵の虛をつくにあると考へ、今の時代が最も要求して居り、而もその要求を充すに足る施設のないもの、第二には人間の實生活に最も關係深く、廣く民衆を目標として而も將來發達の可能性あること、第三に如何なる事

業を選んでも、その經營法が社會と利益を共にし、社會奉仕と自己營利とが兩立するものでなければなぬことである。

そしてこの三つの條件を兼ね具へた事業を發見するには、先づ東京の地理を知り、第二に東京の商業狀態を知る要がある。そこで彼は直ちに神田の某菓子問屋に配達係として住込み、のちに拔擢されて外交係となつたので、一層その點には便利を得ることが出來た。

上京後八ケ月にして、彼が實地の研究によつて着眼したのが卽ち民衆食堂の經營といふことであつた。何故ならば、食事は人間一日の生活のうちの最も樂しいもの〻一つであり、而もそれは人間活動の原動力として無くてはならぬものだ。それにわれ〳〵の生活は物質的にも時間的にも益々せち辛くなり、餘裕がなくなつて來て居る。人間に必要缺くべからざる最も重要な「食事」が若し物質的にも時間的にも安直に供給されたら、これが民衆に歡迎されぬことは絶對にない。否、民衆はその出現を望んでゐる。而も從來の繩のれん式「めし屋」では餘りに非現代的であり、非洋服的である。洋服の會社員や學生が入つても惡くなく、而も伴侶着の勞働者にも少しも威壓的でない民衆食堂の出現こそ、時代の要求に添ふものだと彼は信じたのであつた。

皿洗ひとなつて食堂研究

こゝに考へつくと加藤君は直ちに菓子問屋を辭して、淺草の某洋食店に見習ひに入つた。淺草は東京全市のうちで飲食店の數の最も多い所で、而も最も所謂民衆的なところである。彼の入つた店は殊に忙しい家で、朝八時から夜十二時半頃まで、坐るのは飯を食ふ時だけであつた。然し彼は一心不亂に働き且つ研究した。

けれどもコツク達は新米のものに進んで料理を教へるなどといふことは決してないものである。「皿洗ひ三年」といはれてゐる位で、料理人としての修業には先づ皿洗ひだけでも三年はやらねばならぬものであつた。彼は皿洗ひのひま〳〵には、コツク達の御機嫌をとりつ〻時々揚げ鍋につかまらせて貰ひ、終日の勞働に疲れ切つて寢床に入つてからは、二時三時頃まで、その日氣づいたことを丹念に自分のノートへ書き込むのであつた。

この店は餘りに勞働の激しいせいか、雇人は毎日一人位づつ變るやうな家であつたが、彼はそれを少しも辛いとは思はなかつた。けれども氣ばかり確かでも健康には限りがあつて、彼は過勞の結果神經衰弱に陷り、業半ばにして殘念ながらその店を辭めねばならなかつた。

醫者は頻りに故郷に歸つて靜養することを勸めたけれども、彼にして見ればこんな狀態で歸鄕することは、決して有がたいものではなかつた。金はなかつたけれども、なに、自分の力で神經衰弱なん

か撃退して了はうと決心した。

こゝで男にならねば

恰度その頃サガレン行さの軍役夫を募集して居たので、これからは氣候もよし、大自然を相手に頭を使はずに勞働したら神經衰弱は治ると思ひ、この募集に應じて彼は再びサガレンに渡つた。そして十二年九月一日の大震災は彼の地で知つた。彼は非常に驚きはしたが、それと同時にこれこそ千歳一遇の好機會、この時に男にならねば再び男になる機時がないと考へ、直ちに在京の從弟に賴んで出來るだけ多くの新聞雜誌を送つて貰ひ、これによつて大震災後の東京の事情を出來る限り精密に研究し、愈々その年の十一月十四日に東京へ歸つて來た。

上野驛へ着いて昨日に變る燒野原を見た時には實は感慨無量であつたが、それと同時に益々決心は固められた。彼はその日から直ちに全市を巡つて實地について研究し、自分が嘗て震災前の東京に於て考へた民衆食堂が、今もなほ果して適してゐるか否かを見極めることに努めたが、結果は一層民衆食堂の可能性を大ならしめるものがあつたので、愈々實行にかゝることにした。

彼は其時、再びサガレンの勞働によつて得た三百圓の金を持つて居た。然し如何に災後早々の東京でも、三百圓では餘りに資本が少なすぎた。三百圓から始めて徐々に大をなすとが不可能とは考へなかつたけれど、今はグズ〳〵して居るときでない、一刻も早く相當纒つたものにしなければ時機を逸して了ふ。恰度バラック建築のために兄が上京してゐるのを幸ひ、彼は下げ悪い頭を下げて兄に援助を賴んだのであつた。

須田町食堂の誕生

とても承知しては呉れまいと思つた兄も、彼に信ずるところがあつたかして快く承諾して呉れた。そして共に歸鄕して父に賴んで呉れた。頑固な父は、彼が相場熱にうかされて度々失敗して少なからず迷惑をかけたことに愛想をつかしてゐたゝめに、容易に許しては呉れなかつたけれど、彼の熱心と兄の口添とによつて遂に贊成して呉れた。

彼は早速東京へ引返し、なほ三週間ほど全市を巡り歩いて、漸く須田町の青物市場の附近に場所をトし、こゝに間口二間半、奥行五間の些やかなバラックを建てゝ、十三年三月十日、幸先のいゝ陸軍記念日を選んで民衆食堂を開業した。

斯くしてわが須田町食堂は、帝都の眞中須田町の一角に、些やかに而もいと力強く、呱々の聲をあげたのであつた。これ實に彼の二十七歳の時であつた。

けれども如何にわが加藤清二郎君に經營の才ありとしても、數ケ月間洋食屋の皿洗ひをしたゞけの素人に料理の出來る筈はない。しかし幸ひにも彼が皿洗ひの苦を嘗めつゝ働いてゐる時に、同じ店に

居た同郷の西蒲原郡赤塚村出身の原田屯なる人が、彼の意氣に共鳴し彼の手腕に信頼し、來つて援けて呉れた。そのため彼は全く安心して經營の方面に專心することが出來たのであつた。

原田君は今、須田町食堂總本部仕入部長として最高幹部の一人であるが、加藏君は常に『僕は決して自分一人の力で須田町食堂を大きくしたなどとは思つてゐない。父や兄や原田君や其他大勢の援助の結晶が然らしめたものだ。』と云つてゐる。

驚くべき定價表

加藤君が須田町食堂經營の方針といふのは、先づ民衆相手の安いもの屋である。そして安くて豐富で簡單迅速に食へるやうにといふのであつた。そしてコロツケ三錢、ライスカレー八錢、カツレツ八錢、天丼二十錢、煮魚十錢等々々と實に驚くべき定價表を民衆の前につきつけたのである。震災後の東京市民にこれが如何に歡迎されたかは云ふまでもない。そして開業後八ケ月にして十三年十二月、遂に京橋に第二營業所を起すに至つたが、彼の事業眼によれば、

『流行の最初といふものは仕事がし易いものだ。この流行の潮に乘つてグン〳〵進んで行けば、發展は瞬く間だ。この間に機先を制して發展しておいて、その流れが緩くなつた時にグッと引締めて內容の充實を計るべきだ。』

彼はこの方針の下に利益は全部擴張費に充てゝ、爾來日本橋、銀座、上野、淺草、駿河臺、水天宮前、本郷、神保町、龜澤町と營業所の數を殖やし、それと同時にこれら營業所全部を統轄する本部を設け、各店で使ふ原料は全て本部の仕入部に於て原產地から直接購入し、精米所、冷藏庫、酒加工室ソース製造所、漬物、ソーダ水の製造所まで設備して自給自足主義を殆ど完全に實行し、從つて大量生產によつて益々原料費を廉くし、利益を多くし、これによつて、なほさらに神樂坂、柳島、押上の三ケ所を開業し、總計十五ケ所の營業所を以て帝都の食堂界を獨占しようとしてゐるのである。

賣上年額八十萬圓

彼は開業以來漸次營業所の數も增すにつれ、義兄伊藤啓三郎君を新潟から招いて副店主となつて貰ひ、昨年の九月に組織を確立して營業部仕入部等の職務を判然たらしめ、自分では營業部の統轄、擴張、財政等を擔任して、專ら擴張の方に努力してゐるが、擴張に當つてはその場所についてその附近の住民、附近に働く人、附近を通る人等を充分に調査し、その需給關係を調べ、またこれ迄の營業所の成績統計表をも參酌して見込みを立て收支豫想表を作つて、これによつて規模、設備、裝飾等の投資額を定め、決して無謀な投資をせぬやうにしてゐる。

また各營業所は凡て自治制度にして主任者に委せてあるが、二ケ月毎にその決算報告を提出せしめ

これを統計表にして各店の成績狀態を一目瞭然たらしめ、缺陷ある所は注意を與へるなどして、その經營法はなか〳〵科學的である。

斯くして三百圓の資本で開業後僅かに三年餘りにして、今や營業所十二を有し、本部仕入部の土地建築物だけで約八萬圓、投資總額四十五萬圓に上り、從業員百九十名、毎日收容する客數八千人、一年の賣上八十萬圓といふ大發展を見るに至つた。そして更に現在の擴張計畫が完成して營業所十五となつた曉は、從業員は二百五十名、一日の客數一萬人、賣上年額百萬圓となる豫定だといふ。だが擴張は今年だけで一と先づ中止して、來年からはその力を內に向けて、內容の充實を計るつもりだと彼は語つた。

微かなる不安？

今や須田町食堂は、帝都食堂界に有力なる存在として、そのトレードマークの示す如く「東京名物」の一つにならんとしてゐる。今漸く三十歲の青年加藤淸二郎君は、確かに凡物ではない。その手腕、その明察、その意志力にわれらは敬服せざるを得ぬものである。けれどもその經歷、その年齡、その斯くまでに急激なる大發展を見るとき、誰しも微かな不安を持たずには居られまい。不安とは何であるか？　卽ち血氣に逸つた無謀である。然しその不安は彼自身の賢明なる自重によつて綺麗に拭ひ去られねばならない。彼自らも

『今は建設の時代です、擴張の時代です。私の方針として飽くまで積極的に外に向つて突進しなければならぬ時です。內をより多く顧みてゐる餘裕がありません。それに餘りに急激な發展であるために、從業員がみな不馴れなので、或はお客樣のお氣に召さぬ所が多々あらうことは知つてゐます。しかしもう暫く辛抱して下さい。きつと御期待に背かぬやうにします。』と彼自から云つてゐる。われらは此の言葉に信賴して、好漢今後の活動に一層の期待をかけてゐるものである。須田町食堂が東京名物の名に耻ぢぬものとなるか否かは、勿論今後の彼の努力如何によるものである。

うどん屋の伜から眞珠王

音高く小濱の波ぞきこゆなり貝たちよする風ぞふくらし

志摩の海は貝の名處であつた。殊に潜に潮の花うつくしい鳥羽の海は、眞珠をはらむ貝の名處として有名であつた。

一代の眞珠王と歌はれる御木本幸吉氏が、この鳥羽町に生まれ、やがて世界的にまで、眞珠王の名をひびかしたのも故あるかな。

しかしながら、今日の眞珠王の名をはするまでの背後に如何に艱難と辛苦が横はつてゐたかは、世人の多くが注意してゐまい。現在に於てこそ、ロンドンに支店をもうけ、ニウヨルクに、また巴里に支店をもうけて、歐米の花のごとき佳人の裝身具として、御木本の養殖眞珠は、一層その光りと、美をまし て居るが、その過去に於て御木本氏を狂人と嘲けつた隣人が、如何に多かつたか、今日の燦然たる成果を見る時、益々感慨無量なるものがあらう。

御木本の養殖眞珠は現在年產額三百萬圓を越し、三重の近海を始めとして、長崎、石川、和歌山、沖繩の五縣下に九ヶ所の養殖所をもつてゐる。明治三十九年には國產創始の功勞によつて、綬褒章を賜り、大正十三年には、貴族院議員に勅任され、勳四等瑞寶章を下賜されたとも人の知る所である。

この眞珠王の過去の奮鬪傳は、御木本氏直接の口によつて聽くのが、もつとも感興あり、實感のそぞろに湧くものがあらうと思ふ。

以下の本文は、御木本幸吉氏が、直接養殖眞珠史の一端として、口授されたものそのものである。文中に俺とあるは御木本氏自身のことである。

俺の生れは

俺の家は代々三重縣志摩の鳥羽大里町の阿波幸と云ふうどん屋であつた。俺はこのうどん屋の四代目の伜として生れた。安政五年正月二十五日が誕生日で、幼名は吉松と云つた。

俺は、町人に學問は入らぬと云ふその頃の風習で、これと云ふ學問はさせられなかつた。わづかに九才から十一才までの間、元代議士であつた栗原亮一氏の養父栗原勇藏氏の寺小屋で、讀み書き算盤をならつただけである。十二三の頃から、家業のうどんの粉挽を手傳ひながら、夜は裏町に住んでゐた當時の洋學者岩佐孝四郎氏について讀書を授かつたのだつたが、明治七八年後には、町人に學問は入らぬと云ふやうな弊習がなくなつて、時代的に學問の必要を感ずるやうになつたので、俺は友達と語り合つて、夜學會を設け、その幹事になつた。素より卑近な學問で、智能の啓發上そう高いもので

はなかつたが、多勢の青年連のなかで、卒先して夜學會を唱導した點から、町の人に、

『御木本は機會を捉えることの巧い、なかなか如才のない男だ。』

と評判されたものである。

父のこと

俺の父にも發明的な性質はあつたもので、俺が十二三の時、父は今迄の、うどん粉の捏き方があまり迂遠すぎる。何か便利な機械をつくることは出來ないものかと、しきりに發明に苦心した。その苦心があまりに昂じて、父は遂に病氣になつてしまつた。子供心にも何んとかして父の病氣を全快させたいと念じて、その附近の常安寺の藥師如來は効顯のあらたかなるものがあるときゝ、早速藥師如來に行つて、それから二ケ年間毎月七日に夜籠りをして、只管平癒を祈願したものであつた。この夜籠には、爺さんや婆さんや、盲人などもきてゐて、兩國順禮の御詠歌や觀音經などを唱へながら徹夜するのだつたが、そのお勤めの始まる前に、俺はこの老人たちの足腰をよく揉んでやつたもので、のちには腕が次第に上がつて、普通の按摩にも劣らないほどの腕前になつたものである。

この夜籠の祈願が協つたのか、父の病氣も幸ひに平癒し、明治九年には、父も立派な粉挽機を完成することが出來、同十四年七月には、三重縣からその功によつて、金百圓を下賜されたことがあつた。

大金持になりたい

俺は幼少の時から家業の手傳ひをしながら、うどん屋ではとても金持になれないと思つてゐた。俺の家は四五代引續いてうどん屋をやつてゐるのであるが、身代は少しも膨張してゐない。一杯八厘のうどんをいくら賣つた處で、金持にはとてもなれさうもない。俺だけは何かほかの商賣をして金を儲けたいものであると考へた。

その頃鳥羽で第一の大金持と云はれてゐたのが廣野藤右門氏第二が阿部平吉氏だつた。この二人をのりこすことは思ひもよらないが、一生涯のうちには、せめてこの二人につぐ位の身代になりたいと思つた。この決心を父にも語り、十四の時に俺は青物の行商をやり始めた。

この青物行商も、一通りのやり方では到底金持にはなれないと子供ながらも覺悟をきめて、夜も晝も緊張しつづけて、朝は四時頃に起きて青物の買入れをし、街中

『青物は入りませんか、入りませんか。』

と、呼び歩いた。一方家業のうどんやの方の粉挽きにも身を入れて、夜は十二時まで働かねばならず、朝はまた暗いうちに起きるのであるから、連日睡眠不足ではあつたが、鳥羽で一流の金持になるためには、そんな苦勞位何んでもないと思つた。もちろん朝飯を早く喰べて行く暇も充分ないので、

前夜うどんの籠に入れて置いた薩摩芋の燒けたのを懐に入れて出かけ、市中を賣り歩きながら、暇〳〵に喰べたものである。

かうして青物商賣も奇拔な處があつて面白いと評判になり、商賣も段々大きくなつてきたが、鳥羽の金だけをとつたのでは詰らない、どうかして外國の金もとつてみたいと考へた。その頃、英國軍艦シルベヤ艦が、海圖測量のため、鳥羽の港に碇泊してゐたので、この軍艦に何か賣りつけて儲けようと考へた。

俺は十八の時だつたが、早速町から青物や卵を買ひこんで行つてみた處が、手續きがむづかしくつて乘せてくれない。

折角の考へも水の泡と落膽したが、俺の頭には、ひよいと一つの考へが浮んできた。それは幼い時から、俺は足藝が大好きで、種々の覺えがあつたので、この足藝で、番兵の好意を得てやらうと考へて、最初船板や、船道具などあり合せのもので、特意の足藝をやつて見せた處が、番兵さんたち大いに喜んで手眞似で乘船してもいいと云ふ。すぐさま俺はのりこんで、卵から青物から一切を買つてもらひ、終りに番兵たちは俺を艦長室につれこんで行つた。番兵が艦長に何かチンプンカンプンを言上すると、間もなく士官連が多勢艦長室にきて、ずらりつと並んでしまつた。

すると、又番兵が、先刻やつた足藝をこゝでやつて見せろと云ふのである。こゝが肝心な處と、俺は早速、軍艦の道具を材料につかつて、知つてゐる限りの足藝をして見せた處、艦長始め士官連も、大いに感興をひいたらしく

『面白い日本人だ。今日から當艦に出入自由。』

となつて、その後は同艦の御用商人となり、日用品の一手賣込商人となることが出來て、ほかの商人たちから羨望の的となつたものである。

養殖眞珠を始める迄

眞珠に手をつけ始め、將來は眞珠を商賣に生計を立てようと考へたのは、明治十一年頃のことである。丁度父が隱居し、俺は家督を相續して、幼名の吉松を阿波幸累代の通稱幸吉と改名して、いよいよこれからは一本立で奮鬪立志せねばならぬと考へ、東京横濱大阪神戸の商業地の狀況を視察したことがあつた。その時外國商人特に支那人との連絡をつけたいと考へ、調査物品のうち鮑と眞珠を、商館あてに送つてみた處、鮑は失敗であつたが、眞珠は取引が順調で、多少の利益をみることが出來た。その順調な取引によつて、將來支那向きの商賣をするには眞珠を主にすればきつと儲かると見込をつけたのである。

その後にも波瀾曲折は限りなくあつた。二十三で町會議員に選らばれたり、海産物の有望なことに

見込をつけて、海産物を東京を始め各重なる都市へ輸送を企てて、その方面でも長い間仕事もしたものである。この仕事をやつてゐるうちに志摩海産改良組合が出來て、俺はその理事に選らばれたこともあり、のちにはその組合長に選擧されて、東京方面の正月の飾海老についてかなりな努力をしたこともあり、かうやつて海産物の製造と販路の擴張には實に多くの力を費やして、二十一年六月東京木挽町に開かれた水産品評會には、俺も出品して二等賞を得たことがあつた。

この時俺は上京して、水産會幹事長柳猶悅氏に逢つた。俺は日頃、志摩の海の眞珠について心を潛めて研究してゐたが故に、志摩の海の眞珠が、年々その産額が減少しつゝあることについて相談をした、眞珠貝の生産地である英虞灣の實況の視察を乞ふた處が、柳氏は俺の産業上の篤志に感心したのか、視察を快諾されて、同年七月に柳氏は英虞灣視察にわざわざこられた。

一體、英虞灣の眞珠は、明治十三四年頃には産額一萬圓以上にものぼつてゐたのであるが、眞珠の聲價が高くなるにしたがつて濫獲され、二十年頃には年額わづかに三千圓にすぎなかつた。俺は何んとかして、この英虞灣の眞珠の濫獲を防ぎ、今後のためにその施設を充分にしたかつたのである。

柳氏は英虞灣をつぶさに視察したのち、この灣が眞珠發生の要素を實によく具備して居ることを說かれ、今後は世界的に眞珠は供給され得るものであると共に、天然の眞珠を待つばかりでなく、學理と人爲によつて、眞珠の養殖を企てることも不可でないことを說かれた。

それよりのちも眞珠の研究をつゞけてゐる間に、明治三十三年東京上野に第三回內國勸業博覽會が開設されたのを機會に、眞珠及び眞珠入指輪、簪、鑷針を始め改良鮑、その他、志摩の海産物を出品し、別に生きた眞珠貝を博覽會附屬の水族館に放養した。すると當時の水産部の審査委員であつた理學博士箕作佳吉氏、理學士岸上鎌吉氏等が、顯微鏡で俺の眞珠貝を精密に試驗し、眞珠は學理上生きたる眞珠をして、天然眞珠と同樣のものを造らしむることを得、卽ち眞珠は養殖せしむることが出來ると云ふことを說明された。

卽ち眞珠貝の裡に核となるものを人爲的に挿入して、數年の間海中に放養すれば、その核を覆ふて眞珠貝は眞珠をつくると云ふのであつた。

しかしこの學說を實地に試みようとする者は一人もなかつた。一回の試驗にさへ三四ケ年を要するのであるから、かような迂遠な事業は、餘程の資本がなければ出來るものではない。その上、この事業は海のものか、山のものか解らぬ困難をもつてゐる。俺はこの時に、養殖眞珠の事業が起らないのは、不可能なためではなくして、困難のためであることを悟り、この困難に打ち勝ち、刻苦を惜しまず、不撓不屈の精神をもつて努力すれば、大成期すべきもののあることを確信した。

で、博覽會閉場と共に、その年の八月相洲三崎の帝國大學臨海實驗所に出張中であつた箕作博士を訪ふて學理の說明をきゝ、その說明によつて充分の確信をうるや、疾風のごとく鳥羽に歸つて、俺は妻にだけその決心を語つた。

妻は當時、家政上の努力は凡てその纖弱な身に引受けて、相當艱難を嘗めつゝある折柄ではあつたが、よろこんで俺の相談にのつてくれた。事實、今あたらしい事業を開始することは、現在以上の艱苦を供なふこととて、尋常の婦人ならば、諫止する處であつたが、志操正しく、向上發展の勇氣をもつて居つてくれたがため、俺の決心に共鳴し、この大志を遂ぐるためには、如何なる艱難辛苦に遭遇するも、良人をして後顧の憂なからしめずと、健氣にも俺を勵ましてくれたので、俺は百萬の援兵を得たかのごとき勇氣をもつて、新たなる事業に向つて、一大奮鬪を開始する手筈がしつかりと、こゝに定まつたのである。

氣狂と罵られても

俺たち夫妻が、家業の一切を犧牲に供し、決死的の勇氣をもつて始めた養殖眞珠の事業は、明治二十三年九月より神明村の辨天島に於て始めた。最初のことととこの方法は頗る簡單で、まづ若干の人を雇つて數百間の棕梠繩を絢はしめ、これに木瓦石を結びつけて海中に沈設し、養殖の實驗を始めたのである。

明治二十五年七月に理學博士佐々木忠次郎氏が英國灣内視察に來られ、眞珠貝について種々研究せられた時、俺は眞珠貝の生育と、海底の深淺、土質の硬軟、潮水の關係等について、新らしい博士の所說をきゝ實驗上に少なからず得る處があつた。しかし、實驗しつゝある眞珠貝の方は、幾多の試驗と工夫をこらしても、幾度かその方法も變更して苦心したのであるが、絶えて眞珠らしいものを發見することが出來なかつた。

始めから一敗再敗は、素より覺悟であつたが故に、屈せず奮鬪と忍耐を持續したのであつたが、一向に成績があがらない。その上一大悲慘事として、二十五年十一月には、赤潮が襲來して、神明村に養殖した眞珠は殆んど全滅してしまつたのである。

二十三年以來、その年まで養殖眞珠のため東西に奔走從事して、家業は一切拋棄し、何等の收入もなく、只管その結果を期待してゐたにもかかわらず、この災害に遭つたのであるから、失望と落膽は言語に絶せるものがあつた。しかもこの困難と挫折に耐えて、更に目的を遂行するためには、又新らしく資金を投じなければならなかつた。この悲境に沈臨した時、親類緣者はもとより、朋友知己誰一人、新たに資金を貸し與える者はなく、むしろ、今より斷然この冒險事業から手をきることを勸める者のみであつた。

甚しきに到ると、この俺を目して、

『あいつは大山師だ。眞珠のために氣狂ひになつたのだ。』

と、惡評する者さへ出て來たのである。俺は全く孤立無援の位置に立つてしまつた。

この際に、俺が深い感謝を捧げる者は妻であつた。妻はこの苦境のうちにあつて、よく俺を慰め、俺が資金をうるため席の暖る暇もなく東西にとんでゐる間、よく内を守り、多數の老幼を養ひ、家の家計を見るはもとより、負債の整理、債主との交渉、進んでは事業資金の調達等、凡そ俺の家は、全く妻の手によつて整理されてゐたのである。

俺の不在中、妻は家政の整理に關する書面を、しば〳〵外出先の俺の許に送つてきた。その終りには常に、家事を顧みず、一意專心事業のために盡されよ、との激勵の意味の書いてないものはなかつた位であつた。

今も亡妻を偲ぶよすがにも、當時の妻の手紙を披見しては往事を追想するのである。

煌々たる一個の眞珠

明治二十六年は、俺の生涯のうちでも、もつとも紀念さるべき年であつた。それは即ち、多年眞珠養殖のために盡した苦心が結晶し、二十六年七月十一日、俺の三十六才の時、鳥羽の海に養殖した眞珠のうちから、計らずも煌々たる眞珠を見出したのである。

この時の喜び、この時の歡喜を形容する言葉を俺は知らない。眞に手の舞ひ、足の踏む處を知らず、とんで家に歸り、妻にのみこの大成功を告げて、二人窃に赤飯を神前に捧げて、尙將來の加護を祈つたのであつた。

僅か一個の眞珠にすぎないのであつたが、俺は百萬の眞珠にも必適する希望を將來に感じた。この時は、既に財産は無一物ではあつたが、毫も悲觀しなかつた。

これより更に大規模のもとに、この事業に着手する決心をもち、同年十月更に英國灣のトタコ島に養殖場を設けたが、この島は後曾根農商務大臣が視察のため來島された時、俺の事業が衆庶に德を與ふるとの寓意から多德島と改名した。

わが妻のこと

養殖眞珠の成績は、こののち年を逐つて良好の域に進み、明治廿七年十一月農商務省に養殖眞珠の專賣特許を出願し、同廿九年一月特許を得、之より從來のちどん屋その他は斷然廢業し、一家を擧げて、二月に神明村へ移轉した。

この時、また俺には人生最大の不幸が襲來した。ほかでもなく、妻が卵巣水腫で京都府立病院で療養中、つひにはかなく死亡したことであつた。

過去の刻苦の間、常にこの俺を援けて、眞に內助の功を擧げてくれた妻、しかも今や養殖眞珠の事業も、多年の苦心時代をすぎて、その成果を見んとする時、妻は黃泉の客となつてしまつたのである。

妻は死に臨んでも、俺の手をしつかりと握り、事業の成功しつゝあることをのみ喜んだのである。

碑銘は應響來還　春梅善女、子供は當時十六才を頭に、一男四女、長男の隆三はその時三才にすぎなかつた。

その後、後妻を勸めるものがあつたが、亡妻の深い苦勞を偲ぶ時、もちろんその氣にはなれず、一生獨棲に終らんことを心に期し、迎妻の勸告は凡て拒絕し、亡妻を慰めるために、子女の生長を完全ならしめ、眞珠事業の發展することをのみ決心したのである。

事業のため他方に赴いて歸宅するや、直ちに亡妻の位牌に對して、生ける者に接するが如く、その位牌を抱いて、報告することを絕たなかつた。

そのため、今や位牌の戒名は磨滅してしまつてゐるのである。

眞珠に感謝す

艱難汝を玉にするとは古い支那の格言であるが、俺はその格言の正しいことを想ふ。明治卅二年三月、俺の四十二才の時、銀座の裏手に眞珠店を開店すると共に、四年目には表通りに堂々と開店し、一方英國米國佛國伊國等からの注文品にも接するやうになり、三十四年頃には三千二百個の眞珠を採取し、この金額一千四百圓、三十四年には一萬一千個この金額六萬六千圓の收入を見、三十五年には、兎に角、眞珠貝百萬を放養することが出來るやうになつたのである。

それより以後、俺の事業は大體に於て順調に赴き、明治三十三年十二月には、畏くも故小松宮殿下多德島にならせられ、養殖眞珠についての御令旨を賜るの光榮に浴し、特に御陪食を仰付けられ、御歸京の上特に『以人爲助天工。』との御染筆の刻された大銀杯を給つて、感激の禁じ得ないものがあつた。

日露戰爭の終り、畏くも明治天皇陛下が伊勢に行幸あらせられた時、特に拜謁仰せつけられ、養殖眞珠の狀況をつぶさに申上げてその光榮に感激し、歸途家へもよらず、墓所に赴いて、亡妻うめ子にこの光榮を報告し、歸宅するや、濟生寺の住職が俺を訪問してきた。そして云ふことに

『今度の光榮は一重に阿彌陀樣のおかげである。』

と祝詞を述べられた時に、俺は腹が立つて、

『イヤ、今度の光榮は、俺が苦勞した眞珠のおかげである。眞珠には感謝するが、阿彌陀のおかげぢ

やない。』

と云つたので、住職も呆然として、言葉もなく、引下がつたことがあつた。

本郷バーの基礎を築くまで

不景氣戰線を突破して、整理網をくぐりつつ伸びてゆく商店の健闘ぶりを厨房からのぞいたのがこれである。チエン・ストア全盛時代のアメリカ……そのチエン・ストアのトップをわれに於てきつたものに本郷バーがある。昨今になつてデパートのチエン化が企圖されるとき、いちはやくもかうした簡易食堂及びバーのチエン化に對して手を染めたといふとはその新經營眼に大に驚異すべきとではあるまいか。本郷バー、それは須田町食堂と共に東京たべもの風景を描くに、かゝせない二名物とさへなつた。

大衆本位の安い洋食

本郷バーと言へば、すぐ八錢のカレイライスを思ひ、十三錢のビフテキを思ひ、五錢のポテト・フライを思ふ。

安い——それが誰しもの頭にひびく第一の本郷バー觀でがある。プロレタリヤの豪遊場——一圓持つてゆけば鱈腹食つた上に、お釣りがもらへるといふのが、金ボタンの學生さんや、勞働服の職工や

間借渡世のサラリーマンの御意にかなつて、我も〳〵と押しよせる。灯ともし頃ほひ、新東京の盛り場新宿の本郷バーを覗いた人は、あの可なりひろい室一杯に群れた、本郷バーファンを發見するだらう……。

子供連れの主婦さんまでが、フオークとナイフを動かして、あの洋食皿から、新時代の空氣を吸はふと、つとめてゐるやうにさへ見える。

冬になると、このテーブルでは、牛鍋をつゝいて、あつかんの日本酒を、チビリチビリ手酌でやる失業者の姿もあるといつた具合――ここは一種の中層階級以下の萬華鏡だ。

主人公岡本氏の足跡

岡本正次郎――と言へば或ひは知らぬ人があるかも知れない。が、岡本氏こそは、東京名物本郷バー、この不況に缺損を知らぬ本郷バー、整理閉店乃至併合される店の多い、この時代にグン〳〵伸長してゆく、本郷バーの主人公だ。

『商賣の要諦は』と、マアためしにきいてごらんなさい。彼はまじめな顏で答へるに違ひない。

『熱心と努力、そして節約（無駄を殘さぬこと）の三言につきますね』

今本郷バー隆盛の過去をふりかへつてみるには、さしあたり正次郎氏の、足跡をさぐつた方が、早道である。

午前六時起床、――それから午前九時まで、前日の賣上高計算から手形書類一切の整理、それが彼の朝の日課の一つである。十年一日の如く變らない彼の生活の斷片だ。

明治十七年、廣島縣糸崎町の洋服屋の長男坊に生れた正次郎氏は、幼くして父に死なれると、あとに殘つた母堂妹二人の家族を養ふために、朝鮮の京城へ移つた。

家運挽回の壯圖を抱いて……時、日露の風雲急を告げてゐる頃――實直で柔順な青年だつた正次郎君は、それでも一面きかん氣の負けじ魂をふんだんにもつてゐた。

父からうけついだ洋服屋商賣も思ひの外はかどらず、二三年後彼は思ひ餘つて上京した。

西も東もわからぬ異郷、生馬の眼をぬく東京にほうり出された彼は、一時洋食屋へコツク見習ひとしてはいつた。

それが、彼の洋食屋商賣への、フアスト・ステツプだつたとは、今日の彼自身も、思ひ及ばなかつたらう。

まじめで何事にも努力家の彼は、二三ケ月のうちにスツカリ洋食屋商賣のコツをのみこんだ。

獨立、――彼がはじめて一本立ちになつたのは其の後間もないことで神田表神保町一番地に、名も通りの名にちなんで小川軒――時に明治四十二年――七錢均一の洋食といふので、ドツとおしよせた

お客大勢。

またゝく間に、街から街へ小川軒の名はひろまり、安洋食の評判は傳はつた。が、錦輝館の前に支店を作つたもつかの間、不幸はどこからしのびよつてくるかわからない。

神田の大火は、この千客萬來の店をひとのみにした。其の後彼は大家さんと衝突し、店を明渡して本郷へ移らねばならなかつた。

彼は當時、全くのドン底へ沈んだ。彼は衣類一切を質に置て辛ふじて、敷金だけを工面した。

本郷バー……彼はここにはじめて本郷バーの看板をかけた。手内職でもはじめなくちやと思つてさへゐたのに、意外に店の繁昌するのを見て、彼は大正二年、現在の一丁目に移つた。

が、ここに正次郎氏が活躍發展をのべる時、忘れてならない人に、現總支配人小中山氏がある。

小中山氏との握手

車の兩輪の如く、岡本氏と、小中山氏とは、本郷バーを動かしていつた。

京都人の小中山氏は、何ごとにも細心緻密な頭をもつて、岡本氏の影の形に添ふ如く援助した。

青年時代からの友人同志で、同じ釜のめしを食つた仲で、下宿屋の四疊半に、自炊生活をした二人だつた。

が、青年の誰しもが持つ野望を岡本氏はもつてゐた。一攫千金の夢――その夢を追つて、株に手を出したのである。

しかも、自分の商賣の傍ら、弟の賢章君を國學院大學に通はせたりしたほどの弟思ひの彼だつた。（伊豫今治、大仙寺の住職）

投機――一獲千金の曉には、はなやかなしたい放題の、我儘をしようといふのではなかつた。

衰退しつゝある岡本家の挽回、家運の再興――それが彼の夢だつた。しかし、この夢は結局夢で終つた。彼は賭ける毎にこの投機の勝負に失敗した。

だといつて決して商賣に骨身をおしむ彼ではなかつた。

午前五時――まだあたりが曉の闇に沈んでゐる頃、とつくにおき出た彼は、肉の二三十貫を仕込んだ上で、店の者をおこし錢湯に出かけるのだつた。

商賣はどん〳〵さかる一方なのに、彼が株で失敗しては、そのかさみゆく利益をくづしてゆくのだつた。だが、彼だつて、いつまでも低迷する暗雲のやうな生活の中で、サイコロをふるやうな彼ではなかつた。

震災以前の十一年――株ではとても頭が上らぬと觀念した彼は、ピシヤリと投機から手をひいてし

まつたのである。

投機失敗後

その後の本郷バーの躍進――それは今ここでいふまでもない。

熱心、努力、節約――このスローガンをもつて、彼は商賣の繁榮に奔命した。

入谷、早稲田、吉原、――の三軒の支店を增設して間もなく、かの大震災だつた。不可抗力の前にはいかなる人力も及び得ない。

彼はそこで又無一文になつた。

裸一貫から、やりなほさねばならぬ彼だつた。

振り出しに立つた彼が、その後どんなサイコロをふつたか。

彼は當時、弱い身體を山奥の溫泉場や、湘南の房州海濱に養つてゐた。

が、突然見舞つた天變地異によつて彼は、心身に一大變化を覺えたのだつた。

彼は病める身體に鞭つた。

『ヘエ、遂々本郷バーもつぶれたね、これぢや安い洋食も食えねえな』

行人のかうした無意識に出た言葉をチラリと耳にした彼は、灰かきをし乍ら、燒跡の中で、甦生する彼自身を感じた。

彼はまだ世間から本郷バーが忘れられないことを知るとふるひ立つた。

本郷と吉原に彼はとり敢ずバラツク建築をつくつた。

しかも、彼の策戰は美事効を奏した。百鬼夜行花の盛り場、淺草、――彼は人波にもまれて仲通りを歩いて、ハタと手をうつた。

十二階が爆破されるといふ日だつた。身動き出來ないまでにむれた群集を相手に、彼は生ビールをうり出した。

場所は仲店――ビールがほしくても容易に口に出來ない震災直後のことだ。ビール黨は懷中の金を握つたまんまのんどをならしてゐたのだ。

彼は大日本ビールの倉庫に山積されたビールを片つぱしから仕入れると、テント張りの急造バーをひらいたのである。

とぶやうにうれるビール、五十圓、百圓、百五十圓、やがて二百圓、――眞夏の寒暖計のやうにグン〳〵賣上高ののぼるのをみて、彼がほをえんだことはいふまでもない。

十三年十二月には新に日比谷支店が增設され、彼の積極政策はここに美事効を奏したのである。

五層樓を築く迄

嘗てはやせ細つた病の身を山の出湯や海邊に養つた彼は、心氣一轉、くろ金の如き身體に全靈を打ちこんでひたぶるに商道にはげんだ。

生か死か――のるか、そるか、それが當時の彼の決意だつた。

昭和二年――この年には一躍二十軒の本郷バー支店が增設された。

その秋から岡本氏は內容の充實、整理にとりかゝり、一二年の不況續き位ではビクともしない地盤を築いたのだつた。

新東京盛り場、新宿の名物――新宿ホテルが岡本氏の手に歸したのが昭和二年――第三銀行に擔保にはいつてゐた松本商事會社のものを買收し、中產階級層下向きのホテルとして、解放した。

同時に新宿ビヤホールを開店、そこでは一夜數百のサラリーマンを呑吐してゐる。銀座ナナを新設したのが昨春――昭和二年から四年にかけて、岡本氏の經營網は東京を中心に、橫濱、遠く仙台まではられ、その上自給自足の方針から、板橋に養豚場まで設けられた。

自給自足――四十ケ所もの本郷バー、ナナ、新宿ビヤホール、ホテル、それに先程買收したタイガー……これだけの店が自給自足するには並大ていのわざではない。いや、それはこの經營網の全部にこの自給することは出來るものではない。

果せる哉、自家用トラックを以て運搬し得る飼料の不足の結果は、現在では僅かに三百頭そこ――の豚しか養へないので、遂にこの自給自足はものにならずに終つたのである。

安い――この觀念が不況とともに人々の頭を支配して、世はあげて不景氣の中で破產や、閉店でごつたがへしてゐる中に、繁榮の一途を仙るのも無理はない。

大量仕入――大量販賣――かくてこそ人々は八錢のカツレツが食べられ、五錢のコーヒーがのめるのだ。

本郷に目下建築中の五層樓、仕入本部――ここから全本郷バー、其他に對して、指令は送られるわけだ。

タイガー身賣りの眞相

ここに最近最も耳目をそばたゝせたものに、タイガーの買收問題がある。

昭和五年七月四日――東日紙上にタイガーの身賣問題が一度報ぜられるや、銀座カフユー街には少なからぬセンセーションをまきおこした。

しかも、タイガー從業員の中には一抹の暗雲が漂ひ、不穩な形成を見せたが、一同居殘りで難なく事は解決した。

勿論これは傭人の不始末問題からおこつた事には違ひなかつたが、前經營者は某物産の重役だつたH氏――

H氏としては不況のとばちりをうけ、月々千五百圓位づつの缺損つゞき、H氏も、多忙なところへもつて來て監督も十分行きとどかず――いい後繼者はないかと、ビール鍍泉の常務龜田寅吉氏に話したところ、それなら岡本氏がよからうと、話があつたのが六月の三十日。

二日會見の結果、その場で讓らう、讓りうけませうで、永年銀座カフエー街のキングでもつて、ならしてきた銀座名物タイガーは、八萬圓？　をもつて岡本氏の手に身賣りをしたわけだ。

が、タイガー營業上の騷ぎはなぜおこつたか。

二日會見で即決を見るや、岡本、H氏は同道で、家主の伊東巳代治伯を訪ねたのである。勿論、伊東伯の了解を求めるためだつた。

……が、生憎、伯には來客中で話が出來ずに終つた。その結果、四日に受渡すことになり、一切合切、帳面から品物にも目を通さず、凡そこんな紳士的取引はみたことがないといふ、じつ懇者の話である。これは岡本、H氏がお互に信用しあつてゐたからではあるまいか。

どう人を使つて來たか

次に、岡本氏はいかにして、あれだけの使用人を使つて來たか。

ためしに、本郷バーの被雇人の一人にきいてみるがいい。

彼等は異口同音にいふにきまつてゐるのだ。

『旦那は、自己本位といふことの嫌ひな方です。自分は倒れても、店員だけはたたせてやるといふやうな氣持をもつてゐられるのですよ、

もう五十近い年輩でせうが、店の者は親のやうに慕つてゐるのです。だから、命令にしてもよく行はれるわけですね……』

岡本氏の溫情主義は、まやかしものでない。彼は部下を愛し、本郷バーの各支店を獨立してやらせた。

しかも、彼等の多くは三年、乃至五年、店の主任として勤めただけで、店を貰ふといふことは、可成りの危險性が伴ふ。といふのは彼等主任級の多くは、二十七八から二十八九歳、何れも卅歳前の連中ばかりである。若いから氣がダレルといふのである。

しかも、二期生、三期生と獨立させる必要があり、無條件で店を與へるわけにはいかないのだ。

で、昨年十二月一日から、向ふ三ケ年は、今までの利益率から割り出して、一定額の上納金を本店

へおさめる。かくて三年後には自分のものになる――所謂昔の暖簾をわけるそれである。

それがために、店員の將來をたのしんで、一生懸命働く、無理のない話である。

支店をドン〳〵ふやしてゆくのも、今後、二期生三期生のため、將來身をたててやるために外ならないのであつた。

本郷バーを買ふ以上はいふまでもなく、營業權から、器具一切貰ふのであるが、それに、本郷バーの名を名のつてゐる以上、監督權は不都合のないやうに岡本氏がもつてゐるわけだ。

現在岡本氏が直轄の手をはなれ、讓つた店だけでも現在は廿有二を數へてゐるのである。

彼は、店員を絶對に信用してゐることだ。それに物ごとを善意に解釋して、少し他人が中傷がましい惡口をいつたところで、一たん自分が信じこんだ以上は、どこまでもその人を支持應援してやるといつた具合のやり方だ。

タイガーが、本郷バーに身賣りされた當時、驚異の眼をみはつた人は少くなかつたに違ひない。

高級レストランとしてのタイガーと、安洋食でうり出した本郷バー……その間隔があまりに甚しかつたからだ。

が、どんなに損をしてゐる店でも、何とかして、これは損をしない店にしてみせる手腕、儲けさせる手腕をもつ岡本正次郎氏――かくてタイガーがいかに甦生するかは興味ある問題だ。

甦生せんとするタイガーは、東京電氣の手によつて、その外裝を千數百燭光電燈によつて裝飾し、三越の手によつて室内の大改造が企てられ、九月中旬――はなばなしく新しき經營者の手によつて、銀座の街に向つてその扉を開かれようとしてゐる。

どう繁昌の基礎を築いたか

岡本氏の事業的手腕――それよりも岡本氏について、一番教へられるところの多いのは、氏が平常いかに、店員諸君に對するかといふことだ。

荒生長藏、彼は現に新宿ホテルの雜役夫をやつてゐる老人だ。營業上の理由で支配人の穴澤氏が、これをかく首した時、老人は岡本氏にすがつて、再びホテルに使つてほしいと嘆願したのである。

『可愛想な老人だ、人一人位何とかなるだらう、心配してくれ……』

穴澤氏としては勿論、多少なりとも、店の成績をあげようとして、やつたことには違ひないのであつたが、主人から、さういはれてみると、無下にことわるわけにも、いかないのである。

その後荒生老人が復職したことはいふまでもないが、彼はその恩を感じて老の身を粉にして働いてゐるといふ。

これは或デパートの女店員がたま〳〵買物にでかけた岡本夫人となじみになり、その後女店員の家庭が困窮でこまつてゐること、家には母と兄弟のあること、しかも家は借金の擔保にはいつて、現在では地代さへろく〳〵拂へない始末である事を訴へられ、岡本氏は、その家を買ひとり、その女店員を店の青年にとつがせてやつた上に、その家にその親子一族を住まはせ、その兄弟を自分の店に使つてゐるといふ。

こんな例は一二に止らない。

氏の經營する養豚場は、豫定の成績をあげるまでにはいかないところから、店員間にはこの養豚場閉鎖の聲が高い。

なぁに、なぜ、氏はそれを閉鎖しようとしないのか、そこには閉鎖と同時に路頭に迷はねばならぬ人々數人がそこに生ずるからである。

最初千圓二千圓の小資本でやるつもりでかゝつた仕事が現在では數萬金の金を必要とする時、氏が思ひきつてこの養豚場を閉鎖しないといふのも、さうした店員に對する同情からである。

岡本氏は自分をたよつてくるものはこれをこばまず、見どころさへあれば必ず彼の手で育てるのだ苦學生の救濟、店員の戀愛結婚の媒介までしてやるなどは、氏の性格の反面がしのばれる。

しかも現新宿ホテル支配人穴澤氏は内務省の一官吏、それが小中山氏の紹介で、ホンの一面識によつて、ホテル支配人に拔てきされたのであるといふ。

『あゝされると、心服せざるを得ないのです……』

小中山氏と穴澤氏とは等しくさういつてゐる。

では、繁榮の店、不況を知らぬ、本郷バー經營のスローガンは、と小中山氏に問へば、氏は、

『岡本がロ癖のやうにいつてゐる商道八ケ條といふのがこれです』

と示したのがこれ。

一　信用第一
二　忍耐のなき所成功なし
三　商才は勘にあり、勘は不斷の研究にあり
四　小利に迷ふな
五　利他卽利己と知れ
六　事業卽生命
七　内を治めて外で活動

八　人の難儀を見捨てるな

どんな損失のいつてゐる店でも必ず利益のある様になし得る天才的經營者、これは業界誰しもが認めてゐるところ、今後の發展期して待つべきである。

無一物から大枕問屋になつた一青年

九月一日、それは殊に東京横濱の人々にとつては、忘れ得ぬ、そして餘りにも胸の痛む思出の日である。十萬の貴き人命と數億の財貨とを泥土に委し、持てるものゝ凡てを失つて、つひ再び起つ能はざるに至つたもの幾萬人なるかを知らない。

けれども、凡てが破壞されたといふ事は、凡てが新しく建設さるべき事を意味してゐる。日本の財界、少なくも京濱の經濟界は、全く新規蒔直しのときであつた。そして大いになすあらんとする青年達にとつては、これこそ天譴にあらずして、實に天惠であつたといへる。

そして、この絶好の機會を捕へて大いに工夫し且つ大いに奮鬪して、遂に震災前には何等形をなさなかつたものも、今や牢固として拔くべからざる地盤を築き上げた人々も、決して少くないのである。

震災後今日まで、僅かに滿五年にしかなつてゐない。五年前には全く何も持たなかつたものが、今日堂々たる商人として押しも押されもせぬまでになつたといふことは、それがたとへ大小の差はあるにし

ても、實に偉大な事實である。そしてまた、そこには必ずそれだけの理由がなければならぬ筈である。

瀧富商店、宮永滿團店、須田町食堂等、比々みな然りである。

伊賀の篩屋の伜

大地はまだ頻りに震へてゐた。火の子は雨と降つてゐた。かれ――青年藤澤清太郎君は、火の子を潜り群集をかきわけて、ひたすらに急いだ。本所方面を得意廻りしてゐて、あの震災に遭つたかれは、一旦は被服廠趾に入つても見たが、淺草の主人の家が氣になつて、じつとしてはゐられなかつた。

かれが淺草の主人の家に歸つたとき、主人一家はどうしていゝか解らずにかれを待つてゐた。かれはともかくも主人一家を助けて請地へ避難させ、交通機關の復舊するのを待つて、主人と共に郷里伊賀の上野に歸つた。

かれは伊賀の上野の篩屋の伜として生れた。豊でない彼の家は、かれを中學に出すどころか、高等一年のとき既にそれさへ止めさせねばならぬほどの苦境に陥つた。しかしかれはいろ〳〵父に頼んで、ともかくも高等小學だけは卒業させてもらふとにし、かれは毎日西瓜や梨の行商して僅かな口錢を稼いだ。製絲工場へ入つて、女工達に頭を下げては果物を買つてもらつた。

小學校を終ると直ぐ、月給四圓貰つて役場の給仕に入つたが、やがて世話するものがあつて、大阪船場の鏡問屋に小僧奉公に出た。しかしそれも長くは續かず、半年ばかりで家へ歸り、父の作つた篩類の行商をして歩いた。しかし篩類の行商は冬だけであつたので、夏のうちを遊んでゐるわけにもいかず、提灯屋に四日間見習に入つて曲りなりにも提灯の張り方を覺え、獨力提灯屋を開業した。その時ポスター書きの仕事から淺草の別珍屋商店主和田氏を知つた。

主家の沒落に遭ふ

和田商店といへば東京でも屈指の別珍卽ち絹天の大問屋であつた。それが歐洲大戰の好況時代に、自分の郷里の上野にその裁斷工場を設け、その主任として働く人間を求めてゐた。その相談をうけた土地の年寄りが和田氏に返事を書くべくかれの所へ頼みに來たとき、さういふ次第ならその主任には自分を使つてもらへまいかと、自己推薦を試みた。その人も至極賛成だつたので、早速東京の和田氏に、主任には自分がなりたいといつてやり、和田氏も快くこれを承諾してくれた。

しかし間もなく大戰後の反動は全國を暴し廻り、和田商店も上野の工場を閉銷するに至り、かれも亦大正九年兵として滿洲に出征してしまつた。

二ケ年の義務を卒へて、今後の自分のとるべき道を考へたときかれの頭には東京の和田商店より外に浮ぶものはなかつた。そして昔の主人を頼つて上京して和田商店の店員となつたのは大正十一年

十二月十日であつた。けれども和田商店は既に大正九年以來彌縫に彌縫を重ねて辻褄をあはせて來てゐたので、どうしても大整理をせねばならぬ所まで來てゐた。もうこれ以上の彌縫策は全く施す餘地なく、四十萬圓の身代を擁しにゐた別珍屋商店も、たつた千二百圓の不渡手形で、十二年の二月に遂に破産してしまつた。

蒲團屋廻りを開始

上京後僅々三月足らずで主家の沒落に遭つたかれは、全く木から落ちた猿も同樣であつた。破産といつても、本當の整理がつくまでは店も閉めてゐなかつたから、世間ではまだそれを知らず、相變らず別珍屋商店を認めてゐた。そこで、多くの番頭小僧がみな主家を捨てゝ去つた後を、たつた一人で支へていかねばならなかつた。

洋反物屋といふものは元來非常にはでな商賣で、主人や番頭は絹羽織に白足袋かなんかで、ビラシヤラと得意廻りをし、荷物はあとから、小僧が擔ぎ込むといふやうなやり方であつたが、いまの彼にはそんなことの出來る筈もない。かれは木綿の縞もの一つで、東京中を歩いて、今まで別珍問屋などが一瞥も與へなかつた布團屋に眼をつけて、どんな小さな蒲團屋でも見つけ次第、とび込んでは御用をきいた。

幸ひに別珍屋商店の名は賣れてゐた。それに問屋が直接蒲團屋に賣込むのであるから、普通一ヤール三十錢も儲ける所を二十錢位にしても引合ふといふので、相當注文もあつた。それを今まで同等の商賣をしてゐた他の別珍問屋へ行つて現金で分けて貰つては注文先へ屆け、少しづゝの口錢を得た。それでも一反につき七八圓は儲けがあつた商賣だから、それで主人一家の毎日の生活はどうにかなつていつた。

かれはかうして商賣をしながら、東京の地理を覺えることが出來た。別珍問屋達は頻りに馬鹿にしたけれど、かれはたゞ默々として、期する所あるものゝ如く、蒲團屋歩きを續けた。そこへあの大震災は見舞つたのであつた。

震災後の儲け口

鄕里へ避難したかれは、たゞいつまでもブラ〳〵してゐるわけにもいかなかつた。殊に災後の東京にこそ乾坤一擲の男兒の事業はある筈であつた。こんな所で徒らに避難民扱ひされてゐる時ではない。何か東京へ出て一儲けする仕事はないか。そしてかれはすぱらしいことを考へついた。

上野町にある伊賀製綿株式會社の重役の息子にかれの小學校時代の友達があつた。かれはその友人に話してその父なる重役に賴み、製綿會社の綿千貫を借りたいと申込んだ。

もう十月である。寒さに向ふ災後の東京に、差當り必要なのは綿である。これを東京へ持つていつ

たら、賣れることは請合ひである。しかし自分にびた一文の資本もなし、信用とて全くない一介の素寒貧に、綿千貫貸せといふ申込みは、申込む方が無理であることは知れてゐた。しかしこの好機會をみす〳〵逃すことは餘りに勿體ないとだつた。かれは熱心に說き且つ賴んだ。

八百圓の儲けをフイ

會社では實はあの際とて、綿の處分がつかずに持て餘してゐる時であつたので、かれの熱心に動かされて、思ひ切つてかれの要求に從ふことになつた。かれは直ちに上京して、かねて知り合ひの品川の大きな蒲團屋二軒を訪ねた。幸ひ二軒とも燒けもせず仕事を續けてゐたが、話をきいて直ちにその二軒で一千貫の綿を引受けて呉れた。

かれは直ちに伊賀製綿に電報を發して綿を積出させ、巢鴨に小さな家を借りて主人と共に綿の着くのを待つてゐたが、一週間といふ約束でありながら、荷物は四日市に停滯してゐて動かず、また船が東京へ着いてからも、緊急の日用品の陸揚げの方を急いでゐて、綿などには手を廻して呉れぬ。それやこれやで到頭四十日以上も到着がおくれてしまつた。

しかも綿そのものは、幾日も〳〵材木の下積みになつてゐたために堅くおしつけられて、一枚々々はがすことが出來ぬやうなものになつてしまつた。もうその頃は東京へも、他の方面からどし〳〵と綿は輸入され、いま更らそんなコンクリートのやうな綿の板はどうすることも出來なかつた。製綿會社からも人が出て來て蒲團屋と直接折衝し、双方に止むを得ざる事情が判つたので、双方の妥協によつて片はつけ、自分の信用に傷つけることなく濟んだが、約二ケ月間氣を揉みつゞけたゞけで、八百圓ばかりの儲けをフイにしてしまつた。

死地に救ひの手

それやこれやで巢鴨にもゐられなくなり、主人と共に小石川傳通院の近所に間借りして、また以前の蒲團屋相手の別珍屋をやらうかと考へてもみたけれども震災前破產したまゝで整理もついてゐない主人の名に於て、商品を廻してくれるところとてない。明日の米もない身に、商品仕入れの資本のある筈もない。俺は一體どうすればいゝのだ。さうしてあてどもなく、死といふことまで考へて、とぼ〳〵と歩いてゐたとき、遇然ぶつかつた鄕里の舊友、これこそかれが今日ある大恩人であつたのだ。

友人は京都の木綿問屋の番頭だつた。そして災後の東京へ木綿物賣込みに出張して來てゐたのだつた。友人はかれの現在の身の上に同情してその主人に紹介してくれ、おかげでその問屋の反物を擔いで賣歩くことを快く許して貰つた。かれは主人とその息子と自分の三人の口を糊するために、眞劍になつて歩いた。もと主人が盛大にやつてゐた淺草界隈にまで出かけて、耻をしのび、事情を話しては買つてもらつた。

眞劍に稼げば稼ぐほど、反物は面白いほど賣れた。從つて儲けも出來た。主人は手を合せてかれに感謝した。

かうしたかれの働きぶりは、その木綿問屋の眼にとまらぬといふことはなかつた。問屋はかれの友人を通じて、自分の店へ來ることを勸めた。月給百圓を出すといふのであつた。

かれは熟々いまの自分の身の上を考へた。そして大きな木綿問屋の主人と、裏長屋に間借してお粥を啜つてゐる自分の主人とを比較して見た。この主人にいつまでも、隨いてゐてどうなるのだらう。友人のさういつた言葉は、少しも無理ではなかつた、かれは幾度か心を動かしたけれど、最後に於てふみ止まつた。そして飽くまで哀れな主人を援けて、どこまでも活きる道を講じてやらねばならぬと、決心したのであつた。

さゝやかなる獨立

かくしてかれの尊き努力は續けられていつた。そして再び同情ある別珍問屋の援助によつて、蒲團屋まはりをはじめた。その努力は僅かづゝながらも酬いられて、大正十三年五月にはかれの手元に百三十圓の貯金が出來た。

その間にかれは傳通院わきの間借を引拂つて雜司ケ谷水窪に越して、次に元の古巣に近い淺草に越して、小さいながらも主人に店を出させるまでにした。かれはいよ〳〵獨立するときだと考へた。で、主人には事情を話し、今まで使つてゐた自轉車一臺と蒲團一枚、茶碗一個を貰つて、百三十圓の貯金を懷にして主人の家を出た。

折よく主人の昔の家主が、反物行商當時から、彼に同情して面倒を見てくれてゐたが、その家作の空いてゐるのを、權利金もなしで貸して呉れた。で家主の要らぬといふのを強つて百圓の敷金を納め殘りの三十圓で諸事萬端を購はねばならなかつた。幸ひに三重縣人の震災救護所から蒲團を一枚貰つて來たので、夜のものはそれで間に合せ、疊は一疊一圓五十錢ばかりで八疊と三疊の二間分を買ひ込み、障子は家主に入れて貰ひなどして、どうか斯うか家の格好だけはつけることが出來た。

これが大正十三年五月一日、かれの二十五歳のときであつた。

かれは例によつて蒲團屋歩きに精を出した。まだ東京のどこへ行つても震災の名殘は隨所に見られた頃であつたが、蒲團屋を探しながら歩いてる眼に、フとある洋食器店の店頭に、洋食の皿を澤山積み上げる時に皿の間に挾むワツパ（飾の胴の如きもの）が澤山積み上げてあるのが見えた。かれは直ぐに郷里の父の仕事を思ひ出し、いきなりその商店にとび込んでワツパの買入れ値段をきいた。

店員は解せぬ顏つきだつたが、これをその買入値段で作るから買つて呉れるかどうかときくと、店

でも品不足で困つてゐた時とて非常に喜んで、千個でも二千個でも買はうといふことになつた。かれは直ちに郷里へ電報してワツパ二千個の注文をし、父を吃驚せしめたが、しかしそのために父にも大いに儲けさせもし、またこれが縁となつてその人間を見込まれ、遂にそこの娘を妻に迎へられることになつた。それは淺草松葉町の新實商店であつた。

しかしそれは後のことで、とにかくかれは別珍店としての精進を怠らず、身を粉にして働いた結果、翌年の二月には二百五十圓の貯金が出來てゐた。かれはそれまでは郷里から小さな弟をつれて來て手傳はせてゐたが、十四年の二月十一日に二百五十圓の貯金を以て結婚した。

かけ賣歡迎の商法

しかしかれは、單なる別珍屋では到底今後新方面に大發展を期することは出來ぬと考へてゐた。そして苦心研究の結果、いままで開拓して來た蒲團屋を相手に、別珍製の枕を製造販賣することを考へつき、郷里の名を冠して伊賀越枕となづけて賣出した。果してやつて見るとこれは大成功であつた。何となれば從來枕といふものは凡て職人の手で一つ二つと造られては蒲團屋の手に渡つたもので、職人としては相當多額な工賃をとらねば引合はぬために、枕の値段は相當高いものであつた。それがかれのやうな一つの商人の手に纏められて卸すといふことになると、いはゆる大量生産の原理で、七十錢位のものを五十錢で賣つてもなほ二十錢位の儲けを見ることが出來たからである。

しかもかれが最も人氣を博したのは、『かけ賣歡迎』の標語である。震災後誰もかれも、現金賣買でなければ相手にしてくれず、資本の少い商人は弱り切つてゐる際に、『かけ賣歡迎』の文字は實に一大驚異であつた。東京全市の蒲團屋は風をのぞんでかれの店に集つた。しかもそこは人情で、かう信用されて見るとその信用を傷つけたくはないのみならず、その意氣に感じても、掛代金をふみたほすなどは出來ない。他へは拂へなくも藤澤商店へだけは支拂ふといふことになるのは當然である。そしてかれの店は着々と堅い地盤を築いていつた。

遂に枕問屋の地盤

かれはまた特許局陳列所へ行き、或は夜店をそゞろ歩きしながら、珍しい新案品にヒントを得ては新案の枕を考へ出しては、特許をうけて賣出した。動物枕、人形枕、紙枕、折疊式輕便旅行枕等々々、その數は數へ切れぬほどある。そしてその永續的生命のない、ほんの一時的興味に訴へるやうなものは、懸賞賣出しなどしては一時にどつと賣る工夫をした。また『かけ賣り歡迎』の一方に現金主義を以て安い商品を提供して、資金の運轉速度を出來るだけ早くした。

かれはまた徹底的宣傳主義をとり、あらゆる機會、あらゆる機關を利用しては宣傳した。しかしそ

れにも決して無用の金は使はず、ポスターなどは昔の提灯屋の經驗を以て自ら書きなぐつた。そして謄寫版を使つて自ら印刷しては各方面に配つた。

かれは妻と弟との三人で、夜の眼も寢ずに働いた。かくしてかれの業績は着々と擧つていつた。遂に小僧を使はねばならぬほどになり、女中を使はねばならぬやうになり、雇人の數も殖ゑて來た。

一年は一年と賣上げは增していつた。そして開業滿五年の去る四月には、實に一ケ月六千五百圓の賣上げを見るまでになつた。

今や藤澤清太郎商店は、別珍問屋としてよりも寧ろ一個の枕問屋として、全國的にその名を知られるに至つた。雇人の數は十三人、東京の枕職人約二十人の殆ど全部に自分の仕事をさせ、三千六百部の『東京藤澤商報』を發行し、押しも押されもせぬ大商店となつた。しかも當の藤澤清太郎君は、今年漸く三十歲にしかならぬ青年であることを知つては、實に愉快ならざるを得ないのである。

主人らしからぬ主人

記者が淺草北富坂町にかれを訪ねたのは、三十六度二分といふ殺人的暑さに東京中があへいでゐる日であつたが、藤澤君はちゞみのシヤツに黑ズボンといふ格好で、むさくるしい店でほこりだらけになつて働いてゐた。到底主人には見えず、一店員としか見えぬ質素ぶりに記者は驚いたのだが、

『面倒な話になつたときなど、主人がゐませんからなどゝ胡麻化せて、案外重寶なときもありますよ』といつて彼は笑つたのであつた。

夏中は店もひまだからといふので、鎌倉に家を借りて夫人や子供や女中を避暑させ、店員全部を交替に骨のばしさせて自分は店員に代つて電話をきき、荷造をし、配達までして奮鬪してゐるところを見て、記者はこれあるかなと思つた。

『主人には、働けば働くだけ儲かるといふ樂しみがあるが、店員にはそれがありません。店員に一所懸命に働いて貰ふには、夏のひまな間に出來るなら避暑ぐらゐさせるのは、主人の當然の仕事だと思ひます。自分は避暑避寒でノホ、ンをきめてゐて、それで店員が愉快に働けるなどゝ思つたら大間違ひです。』

そしていかにも愉快さうに、自信ありげに、かれは微笑んだのであつた。

貧しき行商人から旅館王となる

匿名で公會堂の寄贈

其れは寒い北國の空にも、春霞が棚引き始めた昨年の四月頃であつた。新潟縣長岡の市會に向つて、匿名にて公會堂を建築寄贈せんことを人を通じて提案した篤志家があつた。

市會議員の人々は財界不況にして金融逼迫の折柄、殊に名聞を求むる當世に於て匿名にて公共事業の爲めに多額の金員を寄贈せんとする珍らしい篤志家の其床しき心情に驚きの眼を見張つた。さうして其篤志家が日本の旅館王と謳はるゝ同市大野屋旅館主大野甚松氏であつて、開業五十年を記念し、市に對する奉恩奉仕の爲めに公會堂の建築寄贈を發意したのであることを知つて大に感嘆し、案は直ちに滿場一致を以て可決せられ、市は之れを嘉納することゝなつた。

金額は約二十萬圓であるが、市は唯其設計に參與したのみで、工事一式は氏に之れを委任することとなつた。と云ふのは、氏は單に普通の金員の寄附のみにては滿足せず、自ら建築上の天才と實驗をも共に市に提供したので、市當局も亦氏の卓越せる手腕を信じて一任し、完成したる公會堂の寄贈を受くる事になつたのである。かうして氏は東奔西走、各地の公會堂を觀察し、建築材料の如き一木一石、自ら之れを購入し、請負の如きも自ら契約し、其工事監督も自ら擔任して行つたので、竣工した壯麗なる公會堂は、謂はゞ氏が血を濺いだ結晶物とも稱すべく、從つて其實價も三十萬圓に上らんと謂はれてある。

構造は鐵筋コンクリート二階建で、下駄穿きのまゝ出入し得るやうになり、曩に長岡市に寄贈せられた舊寶田石油會社跡に建設せられ、一旦自己の手により落成式を擧行し、更に、市に引き渡し、市にて盛なる開館式を行つた。

長岡市は更に三萬圓を支出して什器の購入配置を大野氏に依頼したが、氏は又更に現金にて二萬圓乃至三萬圓を同時に市に寄附する豫定であるが、其用途に就ては『該基金の利子を以つて名士を招請し、公會堂にて講演を行はしむる費途に充つる事』と云ふ條件が附せられてある。

氏は公會堂を寄贈すると共に、又市民の爲めに其精神をも寄贈せんとするのであつた。氏はかうして教育宗教に關係ある東西の諸名士を一年數回招聘して、市民の精神的修養の向上進展に資せんとす

るのである。

かうした立派な人格者――斯界には稀に觀る端正嚴格なる品行の持主たる大野氏は、如何なる經歷の持主であるか。

全國に網を張る旅館王

氏は實に身を貧しき煙草の行商人より起し、悲風慘雨、人生の有ゆる辛酸を嘗め盡くし、堅忍不拔、千艱萬難と惡戰苦鬪して、赤手空拳、遂に日本一の旅館王とまで出世した輝ける奮鬪經歷の所有者である。

現今我國に於ける旅館業者の數は五萬を越えて居る。而して西洋式のホテルや溫泉旅館等に於ては、規模宏大にして多額の資金を擁して居る者も尠くはない。然しながら大野屋旅館の如く、東京大阪京都市を始めとして、神戸新潟長岡の如き樞要の六大都市に、本支店八箇所十軒の旅舍を有し、賑盛に營業しつゝあるものは、未だ嘗て其比を見ない。日本の旅館王と謳はるゝ所以は、決して偶然ではない。

大野屋旅館本支店所在

長岡本店（長岡市表一ノ町 建物總坪數五〇〇坪）

新潟支店（新潟市古町通 建物總坪數二四〇坪）

同　別館（新潟市古町通 建物總坪數二〇〇坪）

東京支店 有明館（東京市築地 建物總坪三五〇坪）

同城東館（東京市京橋區南槇町 建物總坪數三三〇坪）

同大盛館（東京市日本橋蠣殼町 建物總坪數二二〇坪）

京都支店（京都二條木屋町通 建物總坪數三五〇坪）

大阪支店（大阪市戎橋北詰 建物總坪數二七〇坪）

同　別館（同南區宗右衛門町 建物總坪數一五〇坪）

神戸支店（神戸市北長狹町通 建物總坪數一七〇坪）

氏には趣味も道樂も全く一もない。事業其物が唯一の道樂であり、活動其のものが趣味である。身體頑健と云ふ程ではないが、曾て保養等に出遊せる事なく、今日では全國十ケ所の間を絶へず巡回督勵し、一ケ年の四分の一は實に汽車の中で暮すと云ふ奮鬪振である。さうして各地の旅館業者の間には、旅館の買手が入り込むだと聞くと、其れは又大野屋ではないかと、忽ち警戒さるゝ程で、眞に斯業者の間に彗星と見做されて居る。

幼少母に死別れ父は囹圄

大野甚松氏は新潟縣三島郡關原村の太田多五郎の三男として、明治六年呱々の聲を擧げたのである。關原と云ふは當時煙草の製造所として縣下の第一位を占め、新井、高田地方に耕作せらるゝ煙草は、大部分此關原に輸送せられ、此

處にあつた約百餘軒の製造家に依つて製造せられ、所謂大鹿煙草として、新潟、長岡を始め縣内各地に輸送販賣せられたもので、當時關原の煙草と云ふものは、眞に旺盛を極めたものであつた。

氏の父君多五郎氏は又此製造業を營むで居られたが、素より餘裕ある家柄ではなかつた爲めに、甚松氏は碌に小學教育も受けることが出來なかつた。十歳の頃僅に關原小學校にて六ケ月の教育を受けただけで、其後は村長堀氏の息に付き業務の餘暇、夜學に約一ケ年の讀書を教はつたこともあつたが、殆ど正規の教育は受けなかつた。さうして十歳前後から家に在つて父君の業を助けたり、村中の製造者に、雇はれて、煙草の葉の撰別や、葉のしの業を手傳ひ、月一圓から二圓の勞銀を得て、父の手助けをして居たのであつた。

氏が十一歳の頃は家運が著しく悲況に陷つた。天にも地にも唯一人の懷しい慈み深き母君は、偶とした病氣が元で、歸らぬ遠い旅路に旅立たれ、悲しい涙の痕の未だ乾かないのに、杖柱と賴む大事な大事な父君が、亦誤まつて囹圄の人となられ、かうして家業は衰頽し、窮困のドン底に沈淪したのであつた。

年少重荷を負ふて行商

當時煙草印紙稅法始めて施行せられ當時の家内的小製造業者には大打擊を被らしめたのであつた。慣習の久しき種々なる方法を講じて脫稅を企て、辛ふじて其餘喘を保つて居たものであつたが、遂に脫稅者の檢擧となり、關原村内約五十餘軒の檢擧を見るに至つた。

父君多五郎氏も亦其中の一人となり、僅少な罰金刑にすら服する餘裕がなく、約一ケ月間收監體刑を受けざるべからざる痛ましい身の上となられたのであつたが、以て當時の窮迫の狀を察するに餘りあるであらう。

其後父君歸宅後、營業稅の關係上數軒の製造業者と合併の形に於て、氏の名義の許で製造業を繼續して行かれたのであつたが、關原村の煙草製造の賑盛は既に地を拂い、寂寥のものとなつた。

かうした窮困の間に立つた甚松氏は、到底默視すること丶なつた。五十匁玉の煙草二十個入の大なる煙草箱を脊負ひながら、二里半も距たりたる長岡の市中に之れを販賣し、再び二里半の道を辿りて疲れた足を引ずりながら家路に歸るのが常であつた。

僅か一個の賣上利益は三錢から十錢位のものであるから、一日の收益は五六十錢に過ぎなかつた。當時弱年の小童としては實に尠なからざる收入と謂はねばならぬ。さうして由來瘦軀矮少の氏の事として、僅か十一才の身を以て、一貫目入りの重い大箱を脊負ふて市中を行商するさまを眺めて、當時の

長岡市民は箱が歩いて來たと言つて、溫い同情を拂つたものである。

粉骨碎身主家に奮鬪

十二才の年には、氏は更に新潟市の上大川前通九番町の伊藤周平と云ふ、當時新潟第一の煙草商の所に、見習奉公にやられたのであつた。

然し此頃から既に英才のひらめきを現はしかけた氏は、忽ちにして主人に其才能を認識せらるゝ所となり、當時沼垂町にあつた長谷川煙草店に拔擢せられてやられたのである。此店は主人伊藤氏が古い番頭の爲めに開いた店であつたが、其人不幸にして死去し、跡に遺つた娘夫婦は、經驗なき爲め營業不振になつた兆あるので、之れを援助せんとて派遣せられたのであつた。

さはれ、芳紀十八才の花嫁に靑春二十一才の花婿と職人一人よりなる此店には、年少の甚松氏は小僧であり、下男であり、同時に販賣人でもあつた。さうして朝晩の炊事まで、氏自ら每日やらねばならなかつた。氏は、其の當事の事を追想して

『思へばあの時程辛い事はありませんでした。十二月一日のあの寒い風や、雪の降る時に、川端に出て朝晩米をとぐ時の寒さは、實に身に泌みて、手足は血の逆しるやうなひゞあかぎれに苦しめられたものでした。又川から用水を桶に入れて遠い距離を運ぶ時には、家に來るまでの間に、水の大部分は搖れてこぼれて居る仕末で、今から思ふと實に辛いものでした……』

かう言つて、氏は深い感慨の眼をしばたゝいて居る。

行商振りに市民感嘆

かうして煙草商賣の經驗を得た氏は、十四才に再び鄕里關原に歸り、父君の業を助けながら、長岡、栃尾、出雲崎、小千谷の方面まで遠く重い箱を負ふて行商に每日出掛けたのであつた。何でも其頃は一日往復十里にも餘る遠い路を行商し廻つたと云ふことである。

纖弱い少年の身で、奮鬪餘りに度を越へた爲め、十五才から十六才の頃には健康勝れず、關原から往復するも大儀であつた爲め、長岡西神田の富川屋に宿泊して、所謂出張販賣をして居つた。さうして相變らず重い重い荷物を脊負ひ、骨身を惜まず、一心不亂になつて煙草の行商をして居つた。

遊び盛りの少年の身で、健氣にも眞黑氣になつて稼ぐ珍らしい努力振りを眺めて、市民は少年の龜鑑よと讃めぬ人とてはなかつたが、中にも感激の涙を浮べながら最も感服したのは氏が宿泊して居る富川屋の直ぐ前に住んで、明け暮れ其甲斐々々しい行商の姿を實見して居られた、今の桐生高等工業學校教授にして、本邦アスハルト界のオーソリチーとして、命名嘖々たる高桑藤代吉學士の伯母さんであつた。

發奮上京辛酸を嘗む

寢ても覺めても、何とかして傾ける家運を挽回せんものと心に念じて居た氏は、十六才の五月東京に出て、煙草商で一旗擧げたいと思ふて、當時本所入江町で大工をやつて居られた、長兄辰五郎を迚つて出京したのであつた。

所が煙草商は見込はないと云ふので、淺草田原町の左るパン屋に小僧奉公をすることゝなつた。さうして其所で當時流行の食パン製造を見習はんとしたが、二ケ月程にして此所を去り、暫らくの間は長兄の業を助けながら、大工のまねをやつたり、木材料を入江町から長兄の得意先の本郷切通しまで運搬したり、又時としては露店商人となつて毎夜夜店に出て、菓子の小賣などして見たが、何れも皆うまく行かなかつた。

止むなく、其年の十月に至り、神田連雀町にあつた豐盛堂と云ふ飴屋に小僧として入り、滿一ケ年奉公して居つた。此間蔭日向なき神妙な奮鬪振りが、其店の主人に酷く氣に入られて、行く〳〵は其の親類に養子として貰ひ受けんとする意嚮さへあつたらしかつたが、其中に脚氣を煩ひ、療養する爲め、一旦歸鄉することになつた。

十九歳の年歸省して見れば、故國の土を踏むだせいか、惱んだ脚氣も忽ち拭ふが如く癒つて了つた。律義な質の人とて、歸國の當時東京から遙々携へて歸つた飴の鑵を土産に、以前ひいきになつて居た富川屋や、高桑氏の伯母さんや、藏王材木屋の分家などを歷訪して久濶を叙したのであつた。

借金附の旅館へ養子

之れより先き、其年の七月十六日に高桑學士の親戚なる大野市太郎氏が病死し、未亡人一人で女中二人を使役して、今の大野屋旅館本店の所在地、卽ち長岡市の表一の町で、旅人宿を繼續して居つたのであつたが、前途の程も案じられ、家政も危ぶまれたので、寧ろ未亡人を高桑家に引取つて、老後を送らせては如何かと云ふ議さへ、屢々親類間に出て居つた所であつたから、甚松氏の歸國を見た高桑學士の伯母さんは、平素氏の行動に稱讃已まなかつた所から、忽ち高桑氏の兩親と合議して、取敢へず當分の間大野屋帳場の帳付として手助して呉れるやうにと要請し、九月の末から遂に大野屋に勤務することゝなつたのである。

然るに氏が大野屋に入りて勤務するや、其忠勤精勵振りと云い、老母に對する親切振りと云い、益〻氣に入りて、氏を養子にせんとする、熱望愈々加はり、高桑氏一家にては、切に承諾を求めたのであつた。

氏は承諾して呉れるなら、當時島宗氏に抵當に入つて居る大野家の家屋も、誓つて貰ひ受けてやるからとの高桑氏のお父さんの懇請もあり島宗家からは又太田家に對して其懇請もあつた爲め、默止し難く、實は再び出京して豐盛堂に歸らんとする意志のあつたのを棄てゝ借金のあつた大野家の養

子となることに決定したのである。之れが翌年の十一月頃であつた。

かうして其翌年の一月には、高桑氏のお父さんは、約を履んで下除村の島宗家に行つて、抵當に入つて居つた家屋を貰い受けて來たのであつた。

當時大野屋は間口六間奥行十四間の敷地を借受けては居たが、全體で七室しかなく、客間に宛てたのは五室であり、魚沼、古志郡方面の人が、得意先であつて、毎日三四人の客はあつたが宿料も三飯付十五錢位のもので、其收益も僅少であつた爲め、一家の生計は之れによりて辛くも支へられて居つたのである。之れが大野家發祥の起元であつた。

丸燒から災難續出

越へて二十一歳の年に、同市石内町平澤佐五七氏の長女ツネ子さんを迎へて、芽出度華燭の典を擧げたが、之れが氏に取りて所謂糟糠の妻で、今尙ほ氏の唯一の内助者として働いて居る夫人である。花嫁さんの生家は、高桑家の宅の直ぐ前に在つて、當時鮮魚商を營んで居つたので、高桑氏の兩親の媒酌で、其話が纒まつたのであつた。

伉儷睦まじく間もなく長男一松君が惠まれたので、掌中の玉といつくしみ、一層家業に精が出たのである。

好事魔多きの諺に洩れず、新婚の夢未だ溫かなる其翌年の明治廿七年、恰も氏が廿二才の時であつたが、平潟神社から出た長岡の大火に逢ふて、其家は勿論何一つ取出す暇もなく、家財道具まで悉く燒失せしめたのは、非常な打擊であつた。さうして今は全く裸一貫となつて了つたのであつたが、流石に剛毅不屈の氏の事とて、猛然として蹶起し、更に雄飛の計を講じたのであつた。

當時長岡の市に於ける表一の町の位置は偏在して居つて、寂寥たる町であつた。其處で氏は此機會を利用して、表五の町附近に移轉せんものと、窃かに劃策努力したのであつたが、再び元の處に再築する事に決心したのであつた。

然るに氏に移轉の志ありて、再借地の申出でを躊躇逡巡して居る間に、地主は氏に以前貸與へたる地所の間口を折半し、其一を紺屋に貸し、僅かに其一半しか貸さぬ事になつたので、止を得ず、三間の二十二間の敷地に親戚から借り集めた二百圓の資金を以て、上下四間の假建築を爲し、取り敢へず其營業を始めたのであつた。

一難を經れば一難又來る。かうした窮苦の裡に唯一の慰安者であつた當年二才になつた可愛い盛りの長男一松君が、不幸には火災後の假小屋の中に病死して、掌中の玉を長へに奪い去られて了つたので、流石に物に動ぜぬ氏も、悲嘆に暮れたのであつた。さうして其後も子寶の惠には極めて薄く、遂に今日まで實子を設くるに至らぬのは氣の毒である。

強き精神の持主たる氏は、忽ち悲嘆の深淵より飛躍し、傍ら煙草の行商などし、一方には船着場に出掛けて、鋭意客の吸收に努めなどして一生懸命に商運の發展に努めたのであつた。

斯くて假建築の竣成した其年の秋、更に二百五十圓の賴母子に依りて資金を得たので、增築に着手し、翌年に至り完成し、上下五十四坪許りの建築は玆に完成せられたのであつた。今日から思へば、隔世の感あるが、之けが抑も大野氏が裸一貫振出しの起元であつた。さうして不自由ながら、かうして拵らいた新建築の中に養母ちい子刀自は、六十八歳を一期として、氏夫婦の懇ろなる涙ぐましき溫い看護に守られて、安らかに永眠せられたのであつた。明治廿九年である。

苦心慘憺客の吸收に努む

天は漸く氏の精勵に幸運を投げかけて來たのである。此長岡の大火の後、三年にして所謂渡里町の大火の災があつた。さうして當時長岡の旅館業者の櫛比して居つた渡里町が、再ひ火災にかゝつて一流の旅館は二度燒失し爲めに衰頽に瀕せしめたのであつた。之れが大野家にとりては營業上の一つの轉換期となつたのである。

機を觀るに敏なる氏は、之れを巧みに利用し、勉强に勉强して、顧客吸收策を講じたる爲めに、漸く營業の繁榮を見るに至つた。其處で又第二の增築として、右隣り山見屋の家屋を買ひ潰して增設し間口を廣め、又裏を改築して、漸く發展の氣勢を擧げて來たのである。加之、北越鐵道の一部は開通して、長岡驛が現今の所に開設せらるゝに及び、市内交通系統は一變して、表一の町は市内最も有利の街に轉向したのであつた。

かうして益々繁昌になつて居たにも拘らず、氏は雄心落々、營業上の發展策には最も積極的の方針を採り、廣告術等には常に苦心慘憺し、此忙中更に百日間の長日子と、當時の乏しき資金の一部を割き、高桑氏のお父さんと共に、上方見物に出掛けた。其れは丸燒の災に遭つた四年目の創痍未だ癒ゑざる明治三十年で、氏の二十五歳の時であつた。さうして北陸から關西、四國、關東地方を歷巡し專ら旅館の視察を爲して來たのであつた。

視察の結果は營業上に改良を加へた點は多かつたが、當時長岡市民を驚かしたのは、京都に注文して、人力車夫の饅頭笠の被ひと、前の膝掛に大野屋と銘記したるもの百近く拵らへ歸りて、市中の車夫に與へて被らせた事である。今日であれば何も奇とするには足らぬものであるが、今から三十年前に、廣告術の遲れて居た長岡に、此種の新らしき試みをした所などは、既に遙かに時流を拔いて居つたものと言つてよろしい。

越へて三十五年には、更に東北地方から北海道に掛けて、再び見學旅行に出掛け、旅館の建築に營業方法に常に新しきものを採用して、着々改良進歩に工夫を凝らして居た爲めに、業勢侵々として進

み、嶄然頭角を市内の同業者間に抜き、押しも押されもせぬ長岡市第一位の旅館とまで發展し、旅客の輻湊は增築に增築を以てするも、之れを滿たすこと能はざる盛況であつた。

旭日昇天の勢で大發展

斯くて四十一年には表建築全部を改築するに至つたが、而かも客室の構造の如きも一回は一回より意匠と便宜とを考慮し、進歩改良の跡歴然たるものがあつた。

長岡に其業に從つて、以來茲に二十有二年、既に之れ以上同地に於て、發展する餘地なきを觀破した氏は、其山の如き雄圖と、練達せる經驗智識とを以て、愈々廣き天地に之れを延ばさんと試みたのであつた。而かも幼少の頃より養育した姪とく子孃も、今は養嗣子富治氏を迎ふるに至り、又一方氏が業創の頃より精勵恪勤、獻身的に業に從ひ、其隆盛の一半を背負ふべき功勞者たる番頭佐藤啓治君の功勞にも酬いたき考へに充ち滿ちて居た爲め、茲に決心して愈々支店の開設に着手したのである。

かくて最先に新設せられた新潟支店は豫想以上の好成績を收めたので、愈々力を得、續いて大阪、東京、京都、神戸の各地に九軒の支店を增設するに至り各支店には妹姪甥等近親を配置主營せしめ、京橋の城東館には番頭佐藤氏をして其營業に當らしめて、以て多年の功勞に酬ゐたのであつた。かくして大正一一年以來短き歳月の間に、支店九ヶ所を全國の樞要地に增設するに至つた。

震災直後の迅雷的活動

大正九年財界の大パニック襲來し、實業界何れの方面に於ても、多大の不景氣に遭遇し、倒産閉店等の悲況到る處に現はれたが、常に堅實なる基礎の上に立脚して營業しつゝある大野氏一族の營業には、寸毫の影響だになかつた。世間の不況時代には、一度の不景氣をも味はつた事もなかつた。

加之、大正十二年神戸市長狹町に第七支店を設け、將に其の工竣を告げんとしたる時、恰も九月一日關東大震災に遭遇して、東京に於ける二支店は、殆んど何物をも餘す所なく、全部を烏有に歸し氏等夫妻は僅か身を以て免れた狀況で、損害額は優に二十數萬圓以上に達したであらう。

此未曾有の大慘禍に遭遇して、市民は慘害と雜踏とにて、呆然自失して居る間に、氏は既に善後策に就て胸底深く計劃を進めて居つた。震災數日後に、支店從業者の一部分を海路神戸に送りて、神戸支店の開店を急がせ、遂に其月の二十日に之れを開業したのである。

一面、東京は驚愕と混亂とを以て渾沌時代と化し、保險金の支拂問題、區劃整理問題、支拂制限問題等の重大問題は一も決定を見て居らぬ間にも、氏は一大覺悟を以て、一日も早く築地、南槇町の二支店を本建築を以て、從來と等大の規模に於て再建すべく決心した。而かも其年内に之れを完成せんと企てたのであつた。

斯くて氏は牢乎として拔くべからざる決心を示し、自信力と大勇猛心とを以て時を移さず、或は越後に、或は關西に往復して、建築用材、什器等の購入から輸送、土工、左官の蒐集に奔走し、直に其工を起し、全燒區域内また一軒の本建築を見ること能はざる其年の暮には、既に兩所に巍然たる殿堂を作り、翌年一月には既に其營業を開始して、其人を驚嘆せしめたのであつた。加之更に日本橋蠣殼町には全く新らしく、東京第三支店まで新築した迅雷的の行動に、人をして啞然たらしめたのであつた。今日に至つて之れを見れば、何れも其計劃圖に當つて、所期以上の成功を收めて居るが、保險金も殆んど取れなかつた當時に於て、而かも約三十萬圓の大金を投じて、かうした疾風迅雷的の行動を敢てする其膽、其明、其勇、其謀到底凡人の窺知を許さぬ所である。

注目すべき成功の要素

顧みて大野氏が裸一貫から身を起して、遂に天晴れ日本の旅館王と謳はるゝまでに大成功したのは如何なる原因に基くのであらうか。其第一は氏が腑仰天地に愧ざる立派な人格の持主であることである。即ち（イ）氏は酒も煙草も嗜まぬ品行は頗る嚴正である。（ロ）質素儉約（ハ）謙讓寡言にして（ニ）義に固く報恩の念燃ゆるが如く、一旦恩になつた人は膽に銘じ、其寫眞を佛間に飾り、朝夕禮拜して居る。

第二は優れたる氏の性行である。即ち

（一）精勤恪勤（二）一生一業主義――日露戰役の酒保から歸つて來た當時、長岡市に於ける最大料理店長岡館が經營難に陷つた事あつたが其際長岡市の有力者等の勸誘已み難く、友人と共同經營を行つた事ありたるも、一年ならずして、之れを其友人の單獨經營に委せて、自らは手を引いた。之れが氏に取つては、唯一の他業に携つた實例で爾來家業の外一切關係せぬ。（三）明晰なる頭腦と、強き記憶力（四）丁寧親切（五）思慮緻密にして卓越せる商才（六）豪膽にして早き決斷力（七）約束の嚴守（八）健實にして偉大なる金融上の信用との綜合である。大野屋は誰れが後援して居るのであらう、何處から金を出すのであらうとは氏を知る人々の異口同音に訝かる所であるが、氏は借金をせぬ人である。萬一の場合に具備する爲め、常に多額の現金を銀行に預金して居ると云ふことである。又以て其堅實なる營業振りを想察するに餘りあるではないか。

氏や年齡五十を越ゆること僅に四才、元氣潑溂として壯者を凌ぐ健康を有して居る。今後の活躍將に刮目して見るべきものあるであらう。

米屋の小僧から一流呉服商になつた

東京呉服商組合長　森　濱　三　郎君

白い飯を食ひたさに

『おつ母、又ひば食はせるだかね』

『コレツ、何言ふだか、罰あたりだぞ、このがきつたら、めし食ふ度に小言ぬかしやがつて……』

『だつて……』

『口答へするかつ、いやなら食ふな、出てうせろ……生意氣ばかりぬかしをつて』

父の怨りにふれた濱坊はすき腹をかかえてコツソリ外へ出た。あたりには夕闇がせまつて、彼方の森は巨人のやうに黑く横たはつてゐた。

『おら、いやだ、おらあ毎日毎晩ひばばかり食つて生きるのはいやだ、百姓つてなぜ白いめしを食はねえのかなア……』

トボ〳〵と少年は桑畑の中を歩き乍らたまにしか食えない麥めしをなつかしがつた。麥めしは少年にとつて最大の御馳走だつた。大ていはすきめしだつた。

その中には大根の菜つ葉をこぎざみにぶちこんで食ふのだつた。それをこの貧しい地方ではヒバといつた。

時には大根をついていれたりした。おかづは大てい梅ぼしだつた。

そんな貧しい村だつた。愛知縣丹羽郡丹陽村大字吾髪——これが濱坊の住む尾北の一寒村の名であつた。

そこでは五十軒位の農家が何れも細々と、たきつの煙をたてゝゐた。

平原には一面桑が植えられ、僅かにそれによつて各戸が蠶を養つてゐるのだつた。

濱坊は森佐右衛門の二男坊として多くの兄弟と、兩親の細い腕にはかゝえきれぬ重荷として育てられて來た。

小學校を出たのが十三だつた。

『おら、こんなめし食ふのなら、お百姓はいやだ、いつそ奉公に行くべえかな』

うまい白めしが食ひたいばつかりに人樣への奉公——それも無理ないことだつた。しかし兩親は容

易にウンといはなかつた。手が足りない程、農事の忙しいわけではなかつた。人様に奉公に出すのは可愛想であるといふ、親の子煩悩からでは更になかつた。奉公に出すと、食ふにこまると思はれるのがつらいといふ、兩親のはかないヴアニテイからだつた。

『魚もたべられる、白い暖かいおマンマも食える』少年の人生の希望はタツタそれだけだつた。

桑畑一面の大平原の彼方に夕陽のおちる頃、濱坊はかくれるやうにして、この寒村をあとにした。一の宮の米屋に奉公するためだ。

米屋へ奉公

『白いめしを食ひにおらあ奉公に行くだ』彼は喜びで一杯だつた。

米袋をかつぎ乍ら、御用聞きに廻るのが濱坊の仕事だつた。水汲みから、拭き掃除走り使ひは勿論、子守から、臺所まで少年は忠犬のやうに働いた。機械のやうに敏捷に働いた。……白いめしを食ふために……食ふ度に嘔吐を催すあのヒバよりは白いめしの方がよかつた。白いめしのためには春も秋もなかつた。夏の暑さも冬の寒さも忘れた。十三、十四、十五……數年が夢のやうに過ぎた。

『チヽ、アニキトクスグカエレ』

白いめしに人生の悦樂をおぼえてゐた濱坊は、この電報を手にして愕然とした。

十六の歳だつた。父と兄はせまい六疊の室に枕を並べてゐた。高く頬骨のつき出た顔は血の様に赤く口からは火のやうな息を吐いてゐた。

村醫者は『腸チブスづら、何も食はしちやだめだぞ！』と言つたきりだつた。

灰色の生活難がさなきだに貧しいこの一家におひかぶさつて來た。濱坊少年は白いめしを斷念しなければならなかつた。

肥料の桶をかつぎ、植付けをやり、彼は再び、もとの百姓にかえつたのだつた。丸二年……その間に父も兄も奇蹟的に病はいえた。

田地はあつても現金のないのが村の現在の有様だつた。家には一町歩ばかりの田地があつた。彼は畑に出ては毎日考るのだつた。

男の兄弟が三人、女の姉妹が二人――まづいもので我慢するとしても、相當の年配になればそれぞれ分家しなければならぬ。もし農業するとすれば せまくても五段の田地がなければ足らぬ、この田地をわけてみたところで男一人あたり二段半――家をつくるのに少くとも千圓はかゝる。今一段の田地を賣つたところで千圓には賣れぬ……それに一生小作では頭は上らぬ……彼の鋭敏な頭には早くもかうした算盤がはじかれてゐた。『農業は自分の性にあはぬのだ、それにおらあ學問もねぇでな、身をた

てるには商賣する外にしようがねえ……』

お菓子屋さんへ

四月三十日、四時半起床、仕事場を掃除、朝めしを食べながら、昔のヒバを思ふ。金平糖をこしらへ乍らもう汗が出る。櫻が散る。近所の廓から女達のうかれ聲がきこえるのも春らしい。親爺の金六圓をチョロまかして無斷上京して以來、自分もいろいろ苦しんだ。白いめしを食ふために……。たしか汽車賃は二圓四十錢だつた。絣の着物に兵古帶一本をしめて、淺草の口入屋に行つたのが東京の人と口をきいた始めだ。自分は呉服屋か、米屋に行きたかつたのであるが、保證人の都合や、身元保證金が五圓ないために、一圓の保證金を納めて、ヤツとこの菓子屋にはいつたのだ。確かその時三圓五十五錢殘金があつたのだが、口入れ屋が保證金を五圓等と吹つかけるものだから二圓をかくして一圓で勘辨して貰つたのだ。あの時身體檢査をされたことを思ふとゾツとする。

いつまで金平糖屋で過すのかと思ふと心細くなる。思ひきつて九時半頃仕事がすむと主人に相談する、米屋をやつても結局同じことであるとや、製造がいやなら菓子を卸してやるから、小賣をやつたらどうかといふと等、いろ〳〵慰めてくれたが思ひきれぬ。月給三圓を貰ふ。就寢十二時半。

これは濱三郎坊の當時の日記の一節である、日清戰爭後間もない、その時分、彼は、上京してヴアガボンドの生活から辛うじて、淺草觀音の尾張屋源之助がやつてゐたお菓子屋に、小僧として住みこんだのだつた。

人生は實メエーリー・ゴー・ランドである。祖父の僞病で田舍に連れ戻された彼は、再び白い飯を食いに、十九の六月頃まで名古屋で働き、再び父親に連れ戻された。その間に兄は嫁を貰ひ、機屋をはじめてゐたのだつたが、父と兄とはことごとに衝突するのだつた。

百姓さへやらねばどうにかなるだらうといふので、兄のやつてゐた機屋をはじめた。白木綿糸を買つて織ると、一反で僅かに一錢五厘の利しかない。とてもこれでは食つてはゆけなかつた。こんどは縞物をはじめた。白糸を買ひ赤に染め、茶に染めいろ〳〵にこしらへた。出機もやつた。工女を雇つて來てやつたこともあつた。

乘り出した舟でやつたわけだが、景氣がよかつたせいか、金はいくらでもころがりこんだ。金の一萬圓二萬圓はどうにかなる――彼は大膽に勇氣づいてゐた。

ふくらみ出したふところ

出機も五十位出た。風船玉は益々ふくらんだ。彼は益々手足をのばした。『アレまあ、見ろ、二十かそこいらの男があんなでつかい仕事をしてうまくゆくだかね――ふんとに、もうかればよいだが……』

思へば、二十歳になつた許りの彼が、兄の仕事をうけて、これをやり初めた時、村人は何と言つて、彼をいさめたか、いや笑つたか。

彼は成算なき小心者、しぼりとられ、しなびて自ら沒落への過程を辿つてゐる、農民達の言葉を心ひそかに笑つてゐたのである。

二十二の時、彼は嫁を迎へた。トントン拍子に伸びてゆく事業、そして今はこの美しき新妻――よろこびの絶頂にあつた彼は、間もなくそのトップから轉落したのである。

見よ、突風の如く襲來したパニツク、アツと聲をたてるひまもない。彼は債權者達の蛇のやうな眼をそこに見た。

破産者がバタ〳〵と村から村と、續いて倒れていつた。村人の忠言、村人の杞憂は單に杞憂ではなかつたのだ。

買ふのは現金、賣る場合は掛賣りである。非難と嘲笑を背後にあびて、彼は再び立ち上らねばならなかつた。

そのころからだ。彼がブツツリと好きな酒と煙草をやめたのは……

二十三歳の秋だつた。彼はパニツクの煽りを、ものともせずに、車をひつぱつた。田舍の堅さうな呉服屋とみれば、それを訪ねて、反物を卸してゆくのだつた。

翌年、櫻の咲く頃までには、得意が七八十軒も出來た。で、ヤハリ世の中は思ふやうにならぬものだ。現金賣りか掛賣りとなり、貸倒れが出來る――仕入の方に拂はなくちやならぬ、食ふだけならいいが、これ以上とても伸びてゆけそうにはない。彼はここにかうした田舍での小商賣にスツカリ見切りをつけた。

ガスコークスに着目

ここに彼は數度目の上京を思ひ立つた。大枚金十圓也――それが彼のすべてであつた。漂然と東京に出た彼は、女房の親類に當るソバ屋に身をよせた。

鵜の目鷹の目に彼は商利を漁り歩いた。ひろい東京も、かうして歩いて見れば、案外せまいものに感じられた。勞働者ぢやこの身體が續くまい。ヤハリ商賣だ。

燈臺下暗しとかや、彼はそば屋に日々持つてくる一俵三十八錢のガスコークスにめをつけた。が、資本がない。當時ドンナ小商賣をするにしても三百圓の金は必要だつた。しかも當時神田錦町にあつたガス會社の方では直接販賣はせぬ、それなら特約店でお買ひなさいといふ返事だ。賣るにしても三百圓の保證金がいるといふ――が、彼の熱情はよくこの規定をまげて、ゆるされた。

資本難！　資本難！　彼は膝をまげて金五十圓也を田舎から拜借に及んだ。さて金は手に入つた。彼は先づ猿江の鈴木セメント裏の長屋を敷金八圓、一ケ月四圓で借りた。一疊六十錢の疊表六枚を買つた。障子四枚、土瓶と赤鍋、鐵の七輪合計廿三圓余それが世帶道具であり全財産であつた。序に女房をよびよせた。

殘金二十六圓でカンカン（はかり）を一臺（八圓位）パイスケ（十五錢位）を三組、アンペラ何やかんやを買込んであとに殘つた金は十八圓なんぼ……それに一トン八圓五十錢でコークスをガス會社から拂ひ下げて貰つたが、肝心の車が買えぬ。車を借りてひつぱつた。

そば居向き、鍛冶居向き、お汁粉屋向き、コークスをふるひにわけることをおぼえたが、翌日仕入れると現金はなくなるのだつた。夫婦相談してありつたけの着物を五十圓で質に入れた。眞黑になつて、働くうちにやがて彼はもう二十六の年を迎へる日が來た。

『貴郎もう一年八ケ月になりますわね、貯金が五百圓、貸が二百圓位出來ましたわ』

三月の或日だつた。女房の言葉にしみじみさうだなあと思つた事だつた。

『ドウせ働くことは同じだ、コークスで出來た得意を、利用して、呉服屋をやらう、店の方はお前やんな、おらあ外をまはるからなア』

それから間もなく淺草須賀町に間口十尺奥行四間位の家を借りた。木綿呉服屋開業！　にしても當時の濱三郎君には一軒の懇意もなく一反として貸してくれるところはない。彼は現金問屋、稻村に早朝日參して買ひこんだ。現金が一圓ばかり不足してゐたために、折角の豫定の數だけを仕入れ得ないで、スゴ〳〵歸つた事もあつた。信用のない若僧といはれるとは、くやしいことだつた。店では一日二十圓位は賣れていつた。然しそこはなれぬ商賣だけに、いろんないすかのはしのくひ違ひが出來て來た。七八反もの久留米絣を萬引にしてやられたこともあつた。不幸は不幸を生むものである。

彼はどうにもあがきがとれなくなつた。彼は再び、芳町に轉じた。卸屋をはじめたのだ。然しそれは彼の見込違ひにすぎなかつた。あとからあとから貸倒れが出て來た。彼は日毎夜毎その對策に苦しんだのだつたが、どうにもならなかつた。この煩悶の最中に田舎の父母が上京して來た。

不幸は不幸を生んで

嘘を言つて、その前をつくろはねばならぬ、自分の現在の慘めな氣持を、彼は笑ひでかみころしてゐた。不幸はそればかりではなかつた。女房ははげしい今までの劇務と氣苦勞からドッと重い病の床についたきり、再び起き上れなかつた。

彼は涙を呑んで何時も笑ふとにつとめた。さうでもしなければ、やりきれないのだつた。『お前はこの世にたゞ責苦をうける爲にのみ、生きて來たやうなもんだ、許してくれろ』濱三郎君は冷く鼓動の

うすくなつてゆく女房の枯竹のやうな手をしつかと握つて、男泣きに泣いた。

濱三郎君の父親は若かつたし、それに人並以上の生活力をもつた男だつた。『俺も一つ遊んでゐるのも何だで商賣はじめてみるか』冗談半分でかゝつた深川での呉服屋がトン〳〵と繁昌していつた。一日三十圓、四十圓、やがて五十圓を突破した。一割の利益でも日に五圓月には百五十圓——濱三郎君は、涙にぬれた顏をふき乍ら、兩親の膝下でまめまめしく働いた。薄利多賣——それがスローガンだつた。

隣りの古着屋の權利を買ひ、間口を四間にした。賣上が夏の寒暖計のやうにグン〳〵上る一方だつた。が、ここに突如ぬきさしならぬ問題が起つた。長島といふ當時その界隈で、幅をきかしてゐたバクチの親分の息（妻君の連れ子）が呉服屋をはじめるといふので、濱三郎君の隣に店を開いた。が、どうもサツパリこの方はだめである。濱三郎君に對する商賣のねたみか、個人的感情からか、苦肉の策は設けられた。

當時、家賃四十圓を借りてゐた扇屋呉服店（濱三郎君の店の名）の借家は長島に買ひとられ、立ち退きを迫られたのである。

寢耳に水でさすがに濱三郎君も驚いた。大家が自分の權利をだまつて賣る筈はないと、かけあつてみたが、大家の言ひ方は、成程自分は大家ではあるが、これは金主が移つたので仕方がないといふのである。これでは喧嘩にもならない。それに永代向ふ、相生向ふに行くなら、造作權利に少しは涙金を出してやらねえこともねえとは何のことだ。こちらだつて男だ。意地にもなる。そこで現在の門前仲町の空家相場千圓を千八百圓で買ひこんだ。長島の方では立退料を一文でもくれるどころか、ドン〳〵片つぱしから家をこはしてゆくのである。たまつたものぢやない。この噂は町から町へ尾にひれをつけられて評判になつた。

『エライこつちや、遂々長島の親分が扇屋さんをたゝき出したさうだ、それにしても少し無茶だな』

さうした噂は同情をよんで客足は前に比してグンとふえた。濱三郎君は過去は過去、現在は現在主義であつた。

昨年は二萬圓、今年は三萬圓……商はドン〳〵ふえた。

現在の場所にうつて來たのは明治四十年、——震災前は一年七八十萬圓位の商をしたものである。

七轉八起の半生を見よ

七轉八起といふ。人生は塞王が馬ともいふ。かの幾多の倒産者と、幾多の悲劇をうんだ大正十二年の大震災は數度の試練を彼に下したのである。

身を以て僅かに免れた彼は、震災當時の負債の解決に苦心慘憺した。

彼の背には七萬圓の借金がせ負はされてゐた。銀行預金が四萬圓、外に土地があつたが、それを今全部投げ出すわけにゆかない。

彼はプスプスに燒けたゞれた焦土をテク〳〵問屋筋を廻り歩いて、共存共榮を說いた。半分金を入れ、信用取引だから三年年賦で返却するといふ約束でこれは解決した。時に十月五日。この震災のドサクサまぎれにこの商談をまとめたものは、呉服屋仲間では氏がはじめだつた。

問屋でも前途を悲觀してゐたゞけにおどろきもし、喜びもしたのだつた。

彼ももう今五十一歲である。

うすくなつた頭をなでながら、彼は豪快に笑ひ、さも〳〵愉快げに談ずるのであるが、その言葉の裏、その擧動のどこかに過去の受難生活のあとを見逃すわけにはゆかぬ。

平凡人の平凡成功道について、彼はカンラカンラと笑つていふのである。

『わしが、數十人の店員を手足の如く使つて居る事も、家作の三十數戸もあるとも、つまりは努力ですな——わしも令ではね……。商工會議所特別議員、呉服太物商組合長、商事調停委員、區劃整理員、まだ〳〵色々の名譽職もありますよ、……』

彼はいかにもうれしさうだ。

苦勞にやせた彼は今、金と地位と名譽にふとりつつあるわけである。

八圓の資本から日本一の大ズボン釣り商店主となるまで

八圓の元手から日本一

昔から東京の問屋町と謳はるゝ、日本橋馬喰町の往來繁き電車通りに、松直商店と云へば同業者間に誰れ知らぬ者もなき、谷渡り印ズボン釣りを製造販賣して居る有名な大商店がある。一ケ年の賣上高は約百萬圓に達し、市外下澁谷に約八百坪の製造工場を有し、百餘名の職工を使役して盛んに製造に從事し、尙ほ此外に目黑に約三百坪の鉛筆製造工場を設け、其處にも數十名の職工を使つてヨット印鉛筆を製造販賣し、馬喰町の店にはメリヤス類を販賣し、數多の店員を使つて海外までも手廣く商賣し、ズボン釣り製造販賣に於ては、日本一否な東洋一の大商人と稱せられて居る。

主人は松岡直治郎氏と云ひ、當年漸く四十有三才の壯齡であるが、德望厚く、推されて目下東京ゴム眞田ズボン釣りガーター製造同業組合長を勤めて居るが、僅か八圓の元手から苦心慘憺、努力奮闘して、遂に今日の赫々たる成功を觀るに至つたのである。

二圓の旅費を懷に上京

松岡氏は新潟縣の出身で、明治十六年同縣中頸城郡津有村の貧しき蠟燭兼雜貨商の次男坊に生れたのであつた。

家に餘財ない處へ、子供が大勢あつたので、一家の暮しは益々不如意となつた所から、我が未來のズボン釣り王は、まだ年葉の行かぬ十三才の時、早くも同村の左る菓子屋に、丁稚奉公することゝなつた。

所が其菓子屋の主人と云ふは極く親切な人であつたが、何しろ田舍の小店であるので、子供心に飽き足らず思つて居ると、隣り村の二ツ下の齡の某と云ふが、東京に出て、奉公して居ると云ふことを聞き、同じ奉公するなら廣い東京に出て、奉公した方が優しだと考へ、決心して兩親に其事を言つて熱心に承諾を求めたが、齡も行かぬので、中々許して呉れない。自分の希望が貫徹されないので、二日間寢たまゝ泣きとうしてせがむと、兩親も我を折つて愈々東京出を許すことになつた。

氏は奮躍せんばかりに打ち喜び、十四歲の時、僕が二圓程の旅費を貰つて、懷しい故鄕を後に、折柄笈を負ふて、東京に遊學せんとする書生さんと同道し、日頃憧憬れた、帝都を指して發足したのであつた。

上京早々車の後押し

上野ステーションに安着して、初めて草鞋を脱いだ家は、其頃淺草千束町で、空樽商賣をして居られた叔父君の住宅であつた。

叔父君とて、商賣は僅か月一圓八十錢の家賃の家に住んで居られた位であるから、其家に厄介になつて、素より安閑としては居られない、翌日早々から甲斐々々しく草鞋を穿いて叔父君の挽く荷車の後と押しをやり、驚異の眼を光らしながら廣い市中を、其處此處と歩き廻つて、空樽商賣の手傳をしたのであつた。

暫くして日本橋通油町で、洋物雜貨を商内つて居る唐物屋に丁稚奉公することゝなつた。二年程其店に神妙に奉公して居たが、恰も其家に坊ちやん二人にお嬢さんが一人あり、田舍者の悲しさ坊ちやんには虐められ、さうしてお嬢さんのお供をして、日々學校の送り迎えをさせられると云つたやうな、雜用のみに使はれて、頓んと商賣の道は教はらないので、覇氣滿々たる子供心に飽き足らず、思つて、トウ〳〵辛抱し切れず、其頃ゴムのカラを販賣して居る、清水氏と云ふ洋物雜貨商に奉公換をすることゝなつた。

主人はまだ二十二歳の血氣盛り、學校を出たばかりの商賣には經驗を有せざる素人で、お母さんから資金を出して貰つて、商賣を始めたと云ふ人であつた。

かうした謂はゞお坊ちやん育ちの人であるから、ツイ商賣の道に專念せず、且つ無經驗の事とて商賣に手違を生じ、お母さんから貰つた資金は大方無くして了い、三年程奉公する裡に、轉運漸次衰微するに至つた。

主家の借金取りに苦しむ

つた店員は、一人去り二人去り、ダン〳〵減つて齡下の一人の店員と二人のみとなつて交代で群がる借金取りが店に押し寄せるので、年若き主人は逃廻つて店に居ない。其頃松岡氏は齡も十八七才になつて居たが、店には十四五人も居た。氏は其際借金ほど辛いものはないと痛感し、斷じて借金はしまいと云ふ尊い教訓を體驗したのである。

店に安閑として居つては、金の入る道とてなく、借金取りには、辛い辛い言譯のみをせなければならぬので、其苦痛を逃るゝ爲めには、何とかして金を調達しなければならぬ。其處で氏は心を決し、店の商品を文庫に一杯入れて、其れを背に負ひながら、東京の近在に行商することにし、甲府や靜岡地方や、偖ては靈岸島から魚臭い汽船に乘つて、相州浦賀邊まで出掛け、商品を現金に換へては、主人の借金の幾らかづゝを支拂つて、借金取りに責められるゝ苦痛を遁れて居たのであつた。

かうして行商し廻つて居る間に、種々な辛苦艱難にも遭遇したが、甲府地方に行商に出掛けた

時――其頃汽車は上の原まで通じ、其處から甲府までは馬車であつたが、上の原まで來ると、旅費が既に盡きて了つた。止むなく重い荷物を擔ぎながら、徒歩で行く手を急ぎ、名にし負ふ猿橋附近まで辿る折柄、甲府行きの馬車が其側を通つた。

行商で主家の負債を拂ふ

疲れて居るので、懷の空乏なるのも打ち忘れて其馬車に飛び乘つた。途中車掌から乘車賃を徵せられて、今更の如く眼を白黑さして當惑して居ると、其處に乘り込んで居る北海道の親子二人連れの乘客が其窮を憐んで、甲府迄の馬車賃を立替へて呉れたので、漸く蘇生の思ひをしたこともあつた。又或る時は、同じく甲州路で、重い重い荷を負いながら、山又山の笹子峠の二里の險道を突破したこともあつた。

かうして甲州路を五日程掛つて行商し廻り、百五十圓か、二百圓程の現金を握つて、東京に馳せ戻り、主人の負債の幾分を支拂つて、暫し催促さるゝ痛苦を免ぬかれた。

忠實に年若き店員が協心同力して、健氣にも、主家の爲めに奮鬪し、借金の整理に從事して居たが、軈て店にあつた商品も大方賣り、愈々店仕舞をやることになつた。其時は店員は既に氏一人のみとなつて居た。氏は店の殘りの商品と共に、主人の兄に當る人の家に引取られ、其處で殘品と借金の整理に從事することゝなつた。

半年程其家に在つて、主家の爲めに熱心に整理の難業に鞅掌して居た甲斐あり、持ち越した商品も賣り、借金も片附いたが、店運の換回の目的は遂に達せられず、其年の暮泣く〳〵主家を暇取ることゝなつた。

獨立の旗擧は行商から

其際主家から三ケ年間忠實に奉公した報酬として金二十圓を贈られた、物質は少なかつたけれども、氏が奉公中體驗せる試練の獲物は頗る大であつた。さうして其れはモウ押し詰つた暮れであつたので、翌三十六年の多望多幸なる正月を迎ふる爲めの準備其他に其金の幾らかを消費し、殘金の大枚八圓が、實に氏の開運の資本金の總てであつた。素より八圓の元手では、獨立の店を持つ譯に行かぬ、最初は行商することにした。

折柄小谷田氏と云ふ友人が、靴下留めやズボン釣り、シヤツなどを商内て居たが、氏は其友人から商品を買入れ、淺草から下谷方面の小賣店に向つて、日々行商し廻つたのであつた。

所が其仕入先の友人小谷田氏とても、日本橋坂本町の友人の家に同居して居る位であるから、其處に行つても、仕入るゝ品物がなく、小谷田氏自身の仕入れて來るのを、空しく待たなければならぬことが度々あつた。

其れで氏は夜分に仕入れ、早朝行商に廻はると云ふことにして居た爲め、毎夜遲く淺草千束町の

叔父君の住宅から、日本橋坂本町の小谷田氏の家まで仕入れに出掛け、同人の歸るのを待ち合すべく餘儀なくされたので、毎夜内へ歸るのが午後十一二時頃になつた。

其頃市中には未だ電車がなかつたけれども、目貫きの京橋日本橋の大通りから、淺草の雷門前まで馬車鐵道があり、日本橋から淺草までの馬車賃は六錢であつた。然るに歩いて歸つた所で、歸宅時間が三十分位遲れるに過ぎない。流石に成功する人だけに考へた。之れから内へ歸つた所で、寢るばかりである。六錢奮發すれば、天丼が買へる。馬車賃を儉約すれば、夕飯代が出るから、寧ろ歩いて歸らうと云ふので、深夜重い荷を擔きながら徒歩で歸宅することが多かつた。

かうして血氣盛りの青年が、毎夜遲く歸宅するので、叔父夫婦は或は善からぬ道に踏み迷つたのではあるまいかと、窃かに心を痛めて居られた。

然るに年若きにも似ず、酒は一滴も口にせず、道心堅固に身を持し夜はソンなに遲いのに、朝は五時頃には既に床を離れて、甲斐々々しく身仕度して、早朝重い荷を負ひ、大きな店では相手にして呉れぬので、市中遠近の其處此處に散在して居る小賣業者を歴訪し、將來の成功を樂しみに行商し廻つたのであつた。

之れより先き、氏が僅か八圓の元手を以て行商を始める時、無資無産の紙屑拾いが、日々紙屑を拾つても生活して居るのを觀て、僅か八圓の元手でもあれば、叔父夫婦に叔父の一人の子供と、自分と四人位は暮らされないことはあるまいと、云ふ堅い決心を以て、行商を始めたのであつた。

二三人前の大奮闘

かうして晝夜兼行人の二三人前も働いて、一生懸命に丸一年程行商し廻つて居たが、生活費を控除し、四十五圓の純益が殘つた。

此調子ならと、喜び勇んで居ると、軈て三十七八年日露戰役が突發した爲め、氏は補充兵に召集せられて入隊することゝなつた。義勇奉公の念に厚い氏は、雀躍して戰地に出征したが、其際に一家の大黒柱たる自己が入隊出征しては、後に遺つた年老いた叔父夫婦が、生活し得られないことを熟知して居たので、友人の小谷田氏から七十圓の金を借り、前記の純益四十五圓と合し、百十五圓の金を叔父君の手元に置き、此金があれば物價の安い頃であるから、一年以上は生活し得らるゝであらうと考へ、心を安んじて出征したのであつた。

明治三十八年十二月芽出度凱旋し、軍隊と共に竹橋に入るや否や、氏の無事歸還を鶴首して待つて居た病める叔父君は、心の緩みか、遂に遠逝されたと云ふ悲報に接し、痛くも失望落膽したのであつた。

泣く〳〵野邊送りを濟したが、間もなく除隊となつたので、久方振りにて叔父君の家に歸つた。餘

財なき身の暫し疲れた心身を休養する暇もなく、再び行商することゝなり、友人の小谷田氏の同情で商品を借り、今度は現金で一年程行商して居た。

信義を守つて問屋の同情

其内に大阪の吉阪氏と云ふ洋品雜化商が日本橋久松町に支店を設けたので、其店を知つて居る友人小谷田氏の紹介にて、其處から商品を掛で借入れて販賣することが出來た所から、漸く叔母君を氣樂に奉養することが出來た。

其時叔母君の家は既に淺草雷門前の並木町に移轉して居たが、越えて明治四十三年に其吉阪氏が東京支店を引揚ぐることゝなつたので、計算して觀ると、氏が掛で借りて居つた商品の支拂殘金が、三千圓程に達し、借金になつて居た。

所が手元に其れだけの金が剩つて居ないので、止むなく猶豫を求め、二ケ年賦で償還すると云ふ約束を結んだ。

約半年して半金だけ返還した時、後の半金の償還期を更に少しく延して貰ふべく交渉し、債主から承諾を得た。當時吉阪氏の店に出入して居た商人は、六七名あつたが、取引先が大阪に引揚げたのであるから、拂はぬでも宜いと言つて、借金を其儘にして居た者が多かつた中に、氏のみかうした眞面目に債務を履行して居るので同じ問屋の堀川長兵衛氏なる人が感心して、今度は吉阪氏に代つて、商品を掛で融通して呉れたので、少からざる便宜を得た。一方吉阪氏に對する借金は、儲けで返さうと思つて、一心不亂になつて奮闘し、商品の回轉を早くして利益を多くし、其れで首尾克く殘金を完濟したのであつた。

蚊帳の中で靴下留め製造

かうして氏はワイシャツの腕輪や、靴下留めや、ズボン釣り其他洋品雜貨を販賣して居る中に、ズボン釣りが、其時代に伴ふて益々發展する前途有望なる商品であることを感知し、之れが製造販賣を思ひ立つたのであつた。

其れはかうした動機からであつた。奮闘的で悠々袖手遊んで居ることの嫌な氏は、其等の舶來輸入品は英國品にせよ、獨逸品にせよ、約定してから六ケ月經過せなければ到着せない。其間手を空ふせなければならぬやうな商賣は面白くない。ドウしても一年三百六十五日間斷なく稼げる和製品でなければならぬと、かう痛感したのが、抑も氏が谷渡りズボン釣りの製造販賣を志し、遂に天晴れズボン釣り王とまで發展成功するに至つた根元であつた。

所でズボン釣りを製造するには、相當の資金を要するので、最初は元手の多く入らぬ靴下留めの製造に從事した。眞田紐を買ひ求め、留め金は其れ〳〵職人に誂へたが、初めは職人が面倒がつて相手にして呉れないので困つた。かうした苦心で漸く材料を集め、行商廻りから夜遲く歸宅し、疲れた

心身に鞭ち、暑中などは蚊帳の裡で、蚊軍の襲撃を避けながら、夏の短夜を一生懸命に獨りで工夫しながら製作を試みたのであつた。

初めの間は中々思はしく製品が出來なかつたが、工夫に工夫を重ねる裡に、どうやら製作し得らるるやうになつた。

苦心慘憺ズボン釣の製造

靴下留めの製作が首尾良く出來たので、今度は愈々初一念を貫徹して、ズボン釣り製造を試みることゝなつた。

此時氏は既に一萬圓程の金を儲けて居たので、明治四十三年に淺草瓦町の家賃二十八圓の家屋に引移り、其處を工場として男女六七名の職工を使役し、シンガーミシンを四臺買入れ、製造に從事することゝなつた。

氏は事を創始するに當つて、先づ試驗的にやつて見て確信を得た上に、始めて着手するのが例であるが、ズボン釣り製造工場を設くるに就ても、最初から無算當でやつた譯ではなく、試驗を重ねた結果、稍や成算が出來たからであつた。

何しろ初めての試みであつたから、不完全ではあつたけれども、舶來品に比し二三割安く（今日は約半價）販賣したのであるが、商賣人は和製品に對して不安の念を抱いて居るので、中々買つて呉れず、賣始めには多大の苦心を爲した。

横須賀の海軍に品を納めようと思つて、製品を持つて行くと、ズボン釣りの強弱を試驗する爲め、ズボン釣りを逆さにして、紐を左右に引張られた。惡い品であると、ビリ〳〵裂けて了ふのが例である。其處で氏はさうした風にされても、自店の製造品は丈夫で裂けぬと云ふ自信を示す爲め、早速谷渡り人物印ズボン釣りと命名し、左右の溪谷にズボン釣りを掛け、其上に人が載つて居る繪を描いて、其れを商標とすることにし、登錄したのであつた。

一方には職人を督して自ら製品に從事し、他方には出來上つた製品は、三人の店員と共に風呂敷に包んで、自ら背負ひ、自轉車を飛ばして洋品店を歴訪し、熱心に販路の擴張を計つたのであつたが、前記の如く和製品に對する世間の抱く不安の念から、賣り擴めには、苦心慘憺した。然し流石に意志の强き氏は、毫も勇氣挫けず、努力しつゝ氣永く機運の到來するのを待つて居た。

努力で不況を埋め合はす

其内に某氏と云ふ、同じズボン釣りを製造する競爭者が現はれたが、其店は安物のみを製造し、氏は舶來品を標準とし、優良品を製造すべく、絶えず改良を凝らしたのであつた。

氏は大きな店なら格別、僅か數人使つて居る店には不景氣などはないものであると云ふ確信を有つ

て居るので儲からぬ所を努力で補ふべく決心し、人が十軒廻る所は、自分は二十軒歴訪すると云つたやうに、一生懸命に努力して、熱心に販路の擴張を計つたのであつた。

氏は販路を擴張するには、先づ以て世間に廣く松直商店の存在を示すことの必要なることを感じ、新聞廣告を利用せんとしたが、大廣告は金が掛るので、最初は數行の記事廣告を掲載したのであつた。さうして一面には、專門家に依頼して、其季節々々の繪を畫いた宣傳ビラを市中の各洋品店に配布して、其店頭に釣るし、客の購買心を喚ることに努めた。

かうした慘憺たる苦心と、骨を刻む努力奮闘の甲斐あり、製品に對する需要は漸次增加して來たので、帝都の中心たる商買區域に店舗を有たぬのは、商略上不便少なからぬので、大正三年に日本橋馬喰町二丁目十九番地の電車通りに、間口二間半奥行六間半の店舗を千五百圓で買入れ、其れに九百圓程投じて店構などを整へ、其處に勇ましく松直商店の看板を掲げて打つて出たのであつた。

三大難關を突破成功

店員も今は五人使ひ、店舗の二階は加工工場に充てゝズボス釣りを製造して居たが、小成に安ぜざる氏は、今度は加工のみではなく、原料の眞田紐の織ることから、やつて見ようと云ふ考へを起し、翌大正四年に千駄ケ谷に、織布工場を試驗的に設けた。

周密な氏は、自分が店を離れて專心工場に居つて、生地の織布に從事し得らるゝや否やを試驗する爲めに、工場の脇に自分の住宅を移し、其處から店へ通勤して暫く樣子を見て居ると、店を店員に委して居つても、營業に差支ないことが分つたので、愈々意を決し、專心工場に當つて職工を督し、ズボン釣り用の眞田の織布に從事することになつた。

經驗なき製造工業に從事したことゝて、種々なる困難に遭遇し、創業三ケ年間位は損失續きであつた。何しろ外國から機械を輸入せば、直ぐに間に合つたのであるが、高價なるに手が出でず、止むなく其機械からして、氏の頭腦で工夫せねばならなかつた。機械的素養とてなき氏に取りては、其れが大なる難關であつた、苦心慘憺、幾夜も寢ずに考究した末、獨特の織布機械を發明するに至つた。

次の難關は眞田紐の中にゴムを入れて縫つても、其れが途中で切斷して、舶來品の如く巧く連續せざることであつた。ドウかして舶來品のやうにしたいと思つて、氏は腦漿を搾つて自ら研究を重ねたが、巧く行かず、又學者にも外國の製造法に就て尋ねて見たけれども、知る人とてはなかつた。其内に米國歸りのある人に試みに問ふて見た所が、自分は能くは知らないけれども、何でも白い粉をゴムに附けて織つて居るやうだとの話に、氏はヒントを得、百方研究の末、其白い粉は滑石の粉であることを發見し、試みに白い粉をゴムに附けて織つた所が、伸張自在にして從來の如く切斷せざるに至つ

たので、天に昇らんばかりに喜悦したのであつた。

第三の難關は、職工の操縱であつた。素人が職工を使ふのであるから、其呼吸が會得せらるるまでは、種々の難題を吹つ掛けられて少なからぬ苦心をした。其結果徒弟から養成して、自分の手足の如く働かしむることにした、其爲めに氏の經營に係る工場には、曾て不祥なるストライキ騷ぎの勃發したことがない。

客に對して親切を賣る

かうした幾多の難關を突破し、遂にゴム入れ眞田の織布に成功し、一面卒先利益分配制を布ける店員職工の優遇と相待つて、製品は益々改良せられ、需要は愈々增加して來たので、更に製造工場を市外下澁谷に移し、次で鉛筆製造工場を目黑に設け、同時に其工場内に於て其れ〳〵販賣所を設け、震災後は馬喰町の店舗には專らメリヤス類を販賣し、大正三年馬喰町に乘り出した際には、一ケ年の賣上高約三萬圓に過ぎなかつたのが、足掛け十二年後の今日では一ケ年の總賣上高一百萬圓を算し、東洋第一の大ズボン釣り製造販賣業者と謳はるゝまでに成功發展を觀るに至つた。

尙ほ氏が赫々たる成功史を叙する上に於て、輕々に看過し得べからざる一ツの事實は、氏は客に對して親切を賣るを以て、其モットとし製品一箇々々に就て、絕體に良品を提供すべく細心の注意を拂い、空虛なる廣告手段よりは、寧ろ其製品其ものゝ實質に依つて、自ら販路を擴張せんと期待した其事である。

氏はやさしい心の持主で、慈母に仕へて至孝、孝子奉養の狀、眞に麗はしいものがある。赫々たる今日の成功を觀るは決して偶然ではない。

文房具專業に着眼して成功した伊東屋

ぢしん屋を恐れて店舗を購ふ

文房具は、これまで雜貨店、煙草屋、小間物屋、書店、繪葉書屋等の店の一隅におかれ、兼業乃至副業として賣られてゐた。否現在もその多くはホンの片手間として賣られてゐるものであるが、それを一つの立派な專業として成功したものは、銀座三町目の文房具店伊藤屋店主伊藤勝太郎氏である。伊藤氏は文房具といふものを、他の營業の隷屬から單獨營業に、昇格せしめた最初の人である。

氏は明けて五十二歳であるが、初めはネル屋を營んでゐた。しかしネル地の商賣は期節に關係があつて、その期節には忙しくても、期節を過ぎればカラ閑であつたので、文房具を兼業し後、當時新橋にあつた勸工場博品館内に文房具店を出した。これ伊藤氏が文房具を專業とするに至つた初めであつたのだ。

然し氏は考へた。勸工場で營業するも結構だが、他の廂を借りて商賣ずるのは極めて心細い話だ、もし博品館そのものが閉鎖された場合には、自分は途方に暮れなければならない、それには自分で獨立の店舗を立つに限る。然し店舗をもつたとしたとて、借家で營業するのは勸工場で營業するのも同じだ。當時商人に取つて一番恐ろしいものは『ぢしん』であつた。ぢしんと云つたつて大正十二年のやうな大地震ではない。商人が店舗を借りて、營々刻苦し、漸く暖簾に信用を得て事業の基礎が固まると、判でおしたやうな鯰が動き出す。その鯰とは卽ち家主である。卽ち家主はその店の暖簾の周りかけたのを見ると、何かと問題を起しては立退を持ちかけるのである。かふいふ冷酷なる家主を地震屋といつて借家して營業してゐる商人には一番恐れられてゐる。今日でこそ借家法が制定されてゐるが、その頃はこの鯰が動き出したら最後、どんな固い業礎でも一たまりがなくぐらつく。噴火山上にビク〳〵營業してゐたのは當時の商店であつたのだ。

これを見た伊藤氏は、營業するにはどうしても、店舗を自分の所有としなければならぬと考へた。そして京橋銀座三丁目、今日の營業所に六千圓を投じて、間口三間の店舗を購めたのは明治三十七年氏の丁度三十歳の時であつた。

斬新な文房具と店名の宣傳

その時は氏の友人知己は驚いた。今まで何處の店でも殆んどあるかなきのやうに片手間に賣つてゐた文房具をば、專業として、しかも銀座の大通りへ乘り出して、間口三間の堂々たる大店舗を構へるとは無法もまた甚しい、親しい友人達は幾たびかその中止を注告したが、氏は言下、

『まだ、はひ〳〵してゐて獨り立ちの出來ない赤坊の文房具業をば、立派な男一人前に仕立て上げるのは俺の使命だ、いまに見てゐてくれたまへ。』

とばかり、非常な決心を以てこれに當つたのであつた。然しこれは氏に取つてはなか〳〵の大事業であつたに違ひない。おなじく文房具といつても、在來のものでは到底駄目である、帳簿といつても、和帳簿の店は既に日本橋人形町の伊勢吉がある、これからの世の中は、文運の進むと共に一切の營業事務は洋式になるに違ひない、かう着眼して賣出したのは洋式帳簿であつた。實に氏は日本に於ける洋式帳簿の元祖であつたのだ。而も氏は、注文を待たず、積極的にどんどんその既成品を賣出したのである。

氏の着眼はあやまたず時流に投じて非常な評判になつた。それから簿帳のみならず、贈答用の組合せ文房具などをも創案した。

かくして時流に投じた新機なもの新機なものをと發賣する旁ら、洋式文房具店伊藤屋の名稱を宣傳すべく努めた。或は新聞に雜誌に電車內廣告に。電車內廣告は今日としてはあまり價値の薄いものとなつたが、その當時電車內廣告に第一着に眼をつけたのはやはり伊藤氏であつた。兎に角文房具などといふ、單獨營業としては極めて可能性の薄かつたものを、專業として堂々と廣告し出したのは、恐らく伊藤氏が始めてであつたであらう。或は小學校の學年初めには、各小學校の入學兒童の姓名を調べて、その父兄達へ文房具の直接勸誘をなすなど、それはそれは努めたものである。

和製品のみならず、氏は創業當時から文房具の直輸入を企て、今日愈々盛んに行つて、新規な製品販賣に細心の努力を拂つてゐる。

工場を自家經營しない譯

かくして業務愈々發展したので、大正六年には資本金二十二萬圓の合名會社に組織を變更し、現に親族四名及び店員四名都合八名を社員としてゐる。店舗は前後七回に亘つて擴張に擴張を重ねて今日に至つた。

伊藤屋は專屬工場を幾つも有してゐるが、その工場は悉く自家經營ではない。工場を自家經營しないといふのは伊藤氏の主義である。工場の自家經營といふことに就ては、その道では種々議論のあることだが、氏の意見では工場を經營すると、先づ資本が固定し、冗費がかゝり、職工の爭奪その賃

銀問題などが起つて、商店に取つては工場の經營はなか〳〵困難である、商店本來の目的は、工場はどうであらうとも、要するに良い品を安く賣り、さうして品物を十分に供給し得る能力さへあればよいといふのである。

かくの如くして伊藤屋に於ては、卸業や貿易は一切なさず、小賣を專業としてゐるのである。

店主伊藤勝太郎氏は今日一業主張を奉じて自分の專業に沒頭し、他から慫慂されても決して他の事業には手を出さない。さうして店務は自己直轄であつて、支配人といふやうな名義人をもおかない。また時間勵行の非常にやかましい人で、毎日必ず午前九時から午後六時までは、自ら勤務して店務の總采配を振つてゐるといふことである。

小僧より大成して
日本一の籐細工商となる

家運の傾覆に發奮

裸一貫から日本一の籐細工商人とまで出世した、日本橋區横山町の小管恭太郎氏の光輝ある奮鬪經歷は、將來大に爲す有らんとする、實業青年の好箇の讀物であることを信ずる。

氏は大阪の人で、明治六年の春風駘蕩たる四月、順慶橋四丁目の籐細工商人の長男として、呱々の聲を擧げたのであつた。

以前は中々榮えた店であつたが、偶とした商賣の手違ひから、氏は幼少十歳位な時より、家運俄かに傾覆し家屋敷をも人手に渡し、同じ市内の馬喰町四丁目の、些やかな裏長屋に引越さねばならない羽目に陷いた。

かうなると、人情は薄いもので、店員は續々暇を取つて了つたが、去りとて今は收入も少なく、極

端に經費を節略せなければならない悲慘な境遇となつたので、父君は一日可愛い盛りの幼ない氏を膝下に呼び、涙を流しながら、家の窮狀を訴へ、偖て容を改めて、かうなる上は、親戚の店へ丁稚奉公に出るか、其れとも親の手元に小僧代はりになつて奮闘するか、何れか一ツを撰べと申渡された。

之れより先き、氏は幼な心にも、生計窮迫して、時としては其日の米鹽の料にも、困ることがあるのを見るに忍びず、健氣にも父君の代理として、裕福の親戚の所へ、金策に出掛けたが、其都度親戚の者は、未だ頑是なき氏に向つて、金を貸す前に、先づ口を極めて、父君の行爲を痛罵非難するのが、例であつた。

かうしたことから、氏は幼な心にも他人の賴むに足らず、賴むべきものは自己のみなることを痛切に感じ、將來は斷じて他人の世話にならぬと、堅くも決心して居つたので、父君に對して親の店で小僧代りになつて、一生懸命に働きますからと、潔く答へ、坊ちやん育ちの纖弱い身を以て、其日から雜巾掛けから掃き掃除、使ひ歩きなど、小僧のする業を骨身も惜まず、一生懸命に働いたのであつた。

十歳から小僧代りで奮闘

豫て小學校の先生から『人と云ふ者は三年目に一度は、何か失費のあることが湧起するものだ。さうして、三年間眞面目に働いて居れば、三年目には一年分の貯蓄が出來るものだから、人間は一生懸命に働くと同時に、平生貯蓄に心掛けて、一朝有事の際に準備せねばならぬ』かうして教訓を聞いて子供心にも深く感銘して居た所から、父君から毎月貰らう僅かな給金を間食などに浪費せず、鋭意貯蓄して居た、其貯蓄が積り〳〵て十九歳までに金二百圓となつた。

流石に將來大成する人だけに、行末の身の振り方に就て、日頃考究を怠らなかつた。其結果、自己の從事する職業は、謂はゞ敬虔なる天職である。人間は其職業を天職と確信し、脇目振らずに專心一意、燃ゆるが如き熱誠を以て終始一貫、之れに從事すれば、必らずや其職業に於て、第一流の人として成功するに相違ない。さうして其目的を貫徹するには、漸進主義で一歩又一歩づゝ、堅き地歩を辿りつゝ進み、獨立自主、他人の力を藉らず、自力に依つて勇往邁進することを以て、一生の金科玉條としよう。かう云ふ斷案に到達したのであつた。

之れより先き、父君は二ケ月程前に愈々大阪を見限り、新たなる運命を開拓すべく家財道具を賣り拂つて、三百圓程の現金を懐にし、家族を纒めて輝く帝都に向けて出發し、本郷區新花町に落ち着き、其處に二軒の裏長屋を借り、一軒は住宅に、他の一軒は細工場に充てたのであつた。其頃關東方面には籐細工店が極めて少なく、相當の商賣になると想つたからである。

貯金二百圓を懷に上京

かうして氏は自分の將來從事すべき商賣は、矢張り籐細工が最も有望であり、且つ職商賣でもあるので安全であると考へた。さうして此籐細工商賣を以て、終始一貫しようと堅くも決心した。其れにしては同業者の少ない、從て開拓すべき市場の廣濶な關東方面が有望であると考へたので、血氣盛りの十九の齡に、山の如き抱負を齎らして苦心慘憺、貯蓄した二百圓の金を懷にし、父君の後を追うて勇ましくも東上し、新花町の父君の家に草鞋を脱いだのであつた。時は明治二十四年であつた。

着京後は旅の疲れも厭ひなく、一生懸命に籐細工製作に從事して居たが、何としても客を呼ぶには形勝の地を撰ばなければならぬと感じたので、人の休業する盆の十五日を利用して、腰辨當で市中の繁華な廣い通りに、家賃の安い借家やあると捜し廻つた。

淺草藏前の通りに恰好な店が見附かつたが、値段を聞くと、雜作ぐるみ賣價一千圓と云ふので二の句が續かず、更に終日其處此處と捜し廻つた擧句、淺草區南元町に、間口二間、奥行四間半と云ふ、店を家賃月三圓二十五錢、敷金三ケ月分で、早速借入るゝことゝなつた。其れは氏が二十歳の時、上京した翌年である。

暇を利用して販路開拓

果然、其頃籐細工は東京方面では珍らしいので、南元町の表通りに引移るや、往き交う人々は驚異の眼を光らしながら、頭店に佇立して群集すると云ふ有樣に、自然商品の賣行が增加した。

かうなると、益々勵みが出でゝ、朝は近隣の人々が未だ寢て居る、午前四時頃から床を蹴つて跳ね起き、夜は十二時一時頃迄も、一心不亂になつて奮鬪し續けた。

商賣は日增しに繁昌し、手狹になつたので、翌年更に向ふ側の北元町に、間口二間半奥行十一間と云ふ、店の空いて居たのを幸に借入れた。一方人手が足りないので、慣れた職人が其の頃は未だ東京に極めて少なかつた所から、態々大阪より呼び寄せ、簡單な仕事は東京の職人を使つて鋭意製作の工を進めた。

ジツとして居ては、販路の擴張意の如くならぬので、餘暇を利用しては近縣を旅行した。千葉や東海道方面の附近は言ふに及ばず、兩毛から信越地方、富山から高岡、金澤方面、偖ては仙臺から遠く奥州地方にまで及び、或は草鞋掛けで徒歩し、或は駄馬に跨つたりして、其れ〳〵地方の商家を訪ふて懇談したのであつた。

商品は乳母車とか、家具其他の籐細工の輸入品を模造したのであつたが、如何にして地方に賣り擴

むべきかに就て苦心慘憺した。何しろさうした製品は、其頃邊阪の地方では珍らしかつたので、從て未だ販賣して居る商店とてなかつた。種々考究した末に、平素洋品を取扱ひ、且つ夏季に暇である洋物屋が適當であらうと見當を着けて交渉して見た、始めは中々引受けなかつたが、キツと儲かるからと、熱心に說いて、漸く承諾せしめた。さうして販賣の方法として富山の千金丹賣りの遣り口を思ひつき、始めての商賣であるからと云ふので、試驗的に若干の商品を預け、賣るゝに從つて、代金を回收する方法を採つた。氏自身としては借金は大の禁物であつたのであるが、かうした販賣政策を採つたのは、止むを得なかつたのである。

未だ餘裕の資金とてない時代であるので貸倒れが多くあつては、大打擊である所から、旅籠屋に投宿するや、其主人又は番頭に就て、先づ其土地の有名なる洋品店と其信用程度とを尋ね、更に自ら訪ね行きて、之れならと大體の安心が着いた上にて商談を試み、商品を委托するのが例であつた。かうした用意周到な取引振りの爲めに、貸倒れの災難を少なからず免ぬかれたと云ふことである。さうして氏は無益な滯在費などを儉約する爲めに、其土地に到着するや否や、其時刻の朝と夜とを問はず、直に目的の商家を歷訪して一氣呵成に商談を試み、寸陰を惜んで目覺しく活動したので、販路はドンドン開拓せられたのであつた。

形勝の地に店舗發見

かうして上京して父君の下に兄掛け四ケ年間猛烈な奮鬪を續けて居ると、相當の貯金も出來た。大望を抱く氏は、更に一層の發展を爲さんものと期待し、其方法の一つとして製品の販賣の外に、有利な原料の問屋を開かんものと考へた。さうして問屋を開くには、各種問屋の櫛比する日本橋區內の其處此處を搜し廻つた。

稼業の餘暇を利用して、日本橋區內でないと商略上都合が惡いと感じた所から、

すると、丁度旅籠町に其頃あつた大丸吳服店の直ぐ前に、恰好の安店のあると云ふことを聞き、雀躍しながら行つて見ると、一足違ひにモウ塞がつて居るので失望落膽しながら、橫山町三丁目に差し掛ると、其角の古ぼけた家に貸家札がはられてあつた。以前蠟燭屋が住んで居た店とかで、煤煙にて家中眞黑氣になつて居た。間口は四間、奧行五間と云ふ店で、家賃は月十一圓五十錢だと云ふ。氏は之れを觀て、天の與へと打ち喜び、好機逸すべからずと、早速家主を訪ひ、手金を打つて借入れる約束を爲し、意氣揚々歸宅して、一伍一什を父君に報告した。

赤手空拳背水の陣を布く

所が家運の傾覆に浮世の辛酸を嘗めて、今は堅い一方になつて居られる父君は、身分不相應に急激に店を擴げ、萬一失敗しては大勢の家族を抱へて居る老先が案じられるゝと言つて、强く反對された。

大恩受けた兩親の意に反するは、子として誠に心苦しく、去りとて小規模の商賣振りを爲して居つては、何時まで經つても、大なる飛躍發展が出來ず、進退兩難に陷ぬり、大に煩悶して其夜はまんじりともせず、愼思熟慮した末に、萬一失敗して、大切な兩親に迷惑を掛けては誠に相濟まぬからと云ふので粉骨碎身して築き上げた財産の大部分を弟の名義として兩親の下に潔く提供し、北元町の店は閉ぢて、兩親を南元町の店に安置し、努力奮鬪して必ず成功して、兩親を安堵せしむるからと言つて、其翌日懷かしい兩親の在ます南元町の家を出で、手金を打つた横山町三丁目の店に、勇ましく乘り込んだ。其れは氏が二十三歳の時である。

何しろ懷ろには僅かな現金しかないので、素より派手なことが出來ない、何は兎もあれ、煤烟で眞黑氣になつて居るので、先づ其れを清掃したり、いたんで居た床を手入したりするので、一週間程掛つた。

冷評に發奮して猛烈に奮鬪

萬事儉約とあつて暖簾などは、以前の蠟燭屋で用ゐてゐたのを其屋號だけを切り抜き、其處に自店の新屋號を記したものを縫ひ附け、其儘流用することにした。

往き交う人の眼を惹くには、看板が一番大切であると云ふので『無比德用敷物大王』と大書し、其下に『籐筵製造元、丸籐直輸入、籐細工問屋』と記した大看板を軒頭に掲げた。

移轉したのは暮に近い十一月であつた　主人と云ふのは未だ二十臺で、齡も若く、其れに獨身であるりさう云ふ人が資産も伴はず、土藏の中に入つて商賣すると云ふので、近所合壁では到底一ケ年も持つまいなどゝ噂さし合つて居た。

氏はかうした厭な噂さを耳にするに連れて一層深く責任を感じ、之れは何としても成功せなければならない、親は勿論世間に對して合はす顏がないからと、堅くも決心し、朝はまだ薄暗い中から跳ね起きて、主人公自ら飯を焚く火を附け、其れから表を掃いてから店員を起し、自ら先頭に立つて奮鬪の活模範を示し、一身萬務に當り、晝夜兼行、一心不亂になつて働きに働いた。

二ケ月程經つと、家主から家屋を抵當に入れて居つた期限が到着して、債權者に取られさうになつたから、買つて呉れぬかと云ふ交渉があつた。値段はと聞くと、千二百圓だと答へた。今旗上げしたばかりで、未だ金が出來ぬからと言つて斷ると、家主はお前さんは見所があるから、私が金主を見附けて上げると云ふ。更に借金は大禁物だからと言つて斷はつたが、後にキツと儲かるからと、熱心に勸めるので、今は情誼默止し難く、其意に委した。其結果一旦買つた家屋を、更に九百圓に抵當に入れ、殘金三百圓だけを借金することになつた。之れ實に氏が商人としての初めての借金であつた。

金利は一割五分であつて、其金利に地代、税金其他を合すると、從來の家賃より約三倍の出費を要することになつたので、一層勵みが着いて猛烈に奮闘した所から、店もだん〳〵繁昌し、翌年には三千圓程の純益があつたので、借金は直ぐ綺麗に返濟し得られたのであつたけれども、其金を更に店の擴張資金中に轉用した爲め、三ケ年間で完濟し、愈々三年目に天下晴れての家主となつた。

店運發展の基礎成る

日清戰爭後の明治廿八年十一月頃には、戰後財界膨脹の餘弊漸く現はれて、世は不景氣の暴風に襲はれ、市中の其處此處に空屋が多く續出した。折柄横濱の倉庫に何年間か空しく藏されてほこりだらけになつて居た籐の原料の賣物が出た。値段を聞くと七八百圓と云ふ。商賣に熱心な氏の眼には、其れを綺麗に洗つて加工すれば、四倍位な値で賣れると云ふ見込みが決した。其處で氏は早速之れを買收し、其半は加工し、他の一半は原料として、賣却して見込み通りの利益を攫むことが出來た。

幸運は更に幸運を生んだ。其れは戰爭中に傷病者を、運搬する醫師扱と稱して、馬背の兩側に吊るす籐製の容器を、有名な某請負者から、三千幾つかの下受け注文を引受けたからである。

今日こそ同業者が、市中に二百軒もあるが、其頃はまだ五六十軒程しかなかつた時代でもあつたので、開業後日尙ほ淺き新店が、かうした大注文を獲た譯であるが、同時に淺草時代からの確な商賣振りが誰れ言ふとなく、自然に其請負者の耳に入つた、謂はゞ涙ぐましき眞劍な眞面目な奮闘努力の結果でもあつた。

納める期限は定まつて居る所へ、籐細工する職人が拂底であるので、竹細工をする職人を臨時雇入れて間に合せた。

次で籐の緣のついて居る、水容器十何萬箇の大注文を得たが、又職人の不足を感じたので、今度は大工を雇入れ、流用して、首尾克く期限通りに品物を納附した。

かうして氏は戰爭中に思はぬ大注文を受けて、少なからざる利益を獲得し、獨立開業早々、店の基礎を鞏固にすることが出來た。

二十五貫の荷物を負ふて

獨立開業後十年間と云ふものは、主人か番頭か分らぬ位に猛烈に働き、身には粗末な厚司を纏うて、二十貫乃至二十五六貫目もある重い荷物を背負うて、倉庫と店舗との間を日に幾十度となく往復し、盛夏の季節などは、瀧のやうな汗を流しながら、氣も遠くなるやうな思をしながら、屈せず撓まず目覺しく奮闘したのであつた。

思はざる利益を獲得すれば、氣緩み、業に怠るのが常人の情であるが、流石に大成する人は違つたもので、氏は益々心の紐を引締め

かうした目ま苦しい活動振りに、關東方面に於ける販路は著しく開拓せられたので、今度は更に神戸大阪方面にも猿臂を延べることゝなつた。

さうした裡にも、常に時代の變遷と進運とに深甚の注意を拂ふて、絶えず製品の改良進歩を怠らず、一面外國からカタログを取寄せ、其れを參酌して、嶄新な意匠の下に目新らしい型のものを製作して、市場に提供したので、諸方からの注文は日一日其數を増加するのであつた。

從來原料は神戸大阪方面の輸入商の仲次に依つたものであるが斯くては空しく仲次に口錢を拂はねばならぬ、從て其れだけ高く需要者に賣らねばならぬ。ドウしても需要者に安價に供給せんとするには、生産者から需要者へと理想の實現を計らねばならぬと痛感し、南洋方面の原産地に向つて、原料の直接注文を發することゝなつた。

さうなると、更に南洋諸島の原産地の實況を熟知して居らなければ、適確な商取引が出來ないと云ふことを思ふて、折柄財界不景氣にして商賣閑散なる季節を利用して、南洋諸島視察の爲め出發することゝなつた。所が折惡敷其時季に南洋通ひの日本船なく、去りとて外國語には餘り通ぜぬ氏としては、外國船に乘り込むとは不自由千萬であつたが、斯くては空しく好機會を逸して了ふと思意した所から、意を決して外國船に乘り込んだ。香港までは日本人の船客とては氏一人であつたと云ふ。

斯くて南洋諸島を巡遊し、原産地の實況を具さに視察して、彼地の生産者と直接取引を締結して無事歸朝し、店運發展の根柢を築いた。

其後、歐洲大戰最中、商賣閑散の機を又もや利用して、再び南洋諸島に渡航したが、かうしたやうに、氏は常に不景氣にして商賣閑散の折りを、或は内地に或は海外の視察旅行等に利用して次で來るべき好景氣、商賣繁盛の時季に大飛躍する爲めに、豫かじめ周到なる準備を爲し、さうして豫定の目的を達するのが例であつた。氏には不景氣時代は、更に大に雄飛發展すべき好景氣時代に處する、大切な時代であつたのである。

一心不亂の努力奮闘と、堅實なる商賣振りとの効果着々と現はれて、需要は日を追うて益々増加する一方であるので、さうした熾烈な市場の需要に應ずる爲めに、市外田端に籐細工工場を新設することゝなつた。其處に働いて居る職工と、市中に散在して居る者とを合すると、數百名の多きに達して居る。尚ほ千葉縣銚子町に出張所が設けられてある。

成功の十大原因

性來世話好きな氏は、軈て衆望の歸する所は、籐細工の同業者から推されて、其名譽ある同業組合長にも擧げられ、七八年間も其椅子に在つたこともあつた、現に東京商業會議所議員を始め、日本橋區の幾多の名譽の公職に從事し、今や押しも押され

ぬ日本一の、大籐細工商人とまで、發展成功するに至つた。

孝悌の誼に厚き氏は、父母には厚き孝養を爲し、數人の弟妹には其れ〳〵財を分ち、渡世の途を與へて、懇切に世話を燒いて居るさまは、洵に涙ぐましきものがあると云ふことである。

かうして裸一貫から身を起し、年少時代の理想を貫徹して、堂々たる日本一の籐細工商人とまで出世するに至つたことは偉とすべきであるが、其原因を考究するに、(一)進むべき目標を定め、類例少なき商賣の種類を撰擇し、之れを終始確持せる事、(二)店舗の所在地の撰擇其宜ろしきを得たる事、(三)信用を重んじ、約束を嚴守し、借金を避けたる事、(四)現金仕入れを爲し、良品を廉賣せる事、(五)漸進主義を堅持し、成功を急かず、地歩を固めつゝ徐々に進める事、(六)商賣に熱心にして、絶えず注意し、研究し、製品の改良進歩を工夫せる事、(七)仕入其他の時機に細心の注意を拂ふて誤まらざりし事、(八)顧客本位とし、親切を以て對せる事、(九)不況の際に好景氣の準備に怠りなかつた事、(十)人に倍する努力奮闘を爲し且つ獨立心強く、忍耐力大なる事等である。余は商業に志す有爲な青年が自ら省みて、發奮努力し、以て赫々たる成功の彼岸に、到達せんことを切望する。

岡谷風船商店主が大商店主となるまで

裸一貫から四百萬圓の資産

横濱本町六丁目に本店を構へ、神田區岩本町に支店を設けて、ゴム原料と製品、主としてゴム風船を販賣して居る、岡谷商店主岡谷元治郎氏は、日本第一のゴム風船商で、一ヶ年の賣上高は百五十萬圓に上つて居るが、全くの裸一貫から、赤手空拳を揮つて四百萬圓からの資産を築き、同業者中列ぶものなき、日本第一の大商店主とまで、成功出世した奮闘家である。

氏は慶應三年群馬縣群馬郡長野村の農家に、呱々の聲を擧げたのであつた。實家は元來裕福な家で、祖父は高崎藩の御用商人で、父君の時代に官林拂下をやつて、失敗したのが家運傾く元であつた。

次男坊に生れた氏は、十八歳まで實家に在つて農耕に從事し、肥桶まで擔いて勞役に服し、其餘暇には蠶の種紙を近郷近在に賣り歩いたり、家計を助けて居たのであつた。

十圓を懷に故郷を出づ

十八歳の時、發奮立志、開港場たる横濱に出で運命を開拓せんものと思ひ、僅か十圓の金を懷にし、脚絆草鞋掛けと云ふ甲斐々々しい扮裝で、懷かしき故郷を後に高崎から鴻巣迄、二十何里の道を一日で徒歩し、翌早朝鴻巣の宿を出立し、疲れた足を引ずりながら、目的地の横濱の宿屋に投じたのは、其日の黄昏時であつた。

宿屋で横濱の奉公口を色々と尋ねて見たが、ドウも目的の思はしい商店がないので、一旦歸村して、時機を見て再び上京することとし、大山を參詣して其儘歸郷した。

三ケ月程内に居つて、將來の身の振り方に就て種々勘考して見た末、狹い田舍に居つては延びないと思つたので、愈々心を決し、五圓の旅費を懷にし、再び横濱を指して出發した。

商人宿に二三日宿泊して居る中に、參州の左る筆墨商と知り合になり、誘はるゝ儘に一所に奥州方面へ行商に廻はることゝなつた。其れは其商人から特別會計で、一日だけ商品の筆墨を借り、奥州の町々を二手に別れて行商し、晩に同じ宿に落ち合つては、其日の計算するのであつた。

行商で儲けた百圓で開業

かうして三ケ月程奥州方面を行商し、百圓程の金を儲けた。其れを元手に愈々筆墨店を開いた。氏が二十歳の時である。

店を開くには場所が第一であると云ふことを熟知して居たので、日々市中を探し廻つた末に、横濱南仲通の横濱小學校から半町程隔つた所に、米屋があり、其店の一隅を貸せると云ふことを聞き込み、之れ幸と早速交渉し、其店の一隅を月三四圓の家賃で、借入れることゝなつた。さうして獨身であるので、最初は自炊して居つた。

軈て二百圓程の金が儲かつたので、間口二間奥行五間の其店を、全部月家賃九圓で借入れ、雜作は五十圓で讓受け、屋號を鳳林堂と命名し、先づ商品の筆墨を他店より割安に賣り、且つ丁寧親切に小學生を待遇してやつたので、開店早々相當の來客があつた。

流石に成功する人だけに、着眼點は群を抜き、人と同じ商賣をして居つては到底大なる儲を爲すことが出來ないから、何か目新らしい商品を發見せんものと苦心し、絶えず注意を怠らなかつた結果、居留地の支那人の筆墨商店で、其頃珍らしかつた唐墨を見附けた。

氏は雀躍しながら其唐墨を仕入れて、東京の筆墨問屋に持つて來た。果然珍らしいので、續々注文があり、一日に二回汽車に乘つて、東京と横濱間を往復し、横濱の支那人の店で唐墨を仕入れては、東京の筆墨問屋へ賣捌いて、金を儲けたのであつた。

珍奇な商品に着眼

在來の普通の筆墨商では、大なる發展は六ケ敷しいと思つて、例に依て珍奇な儲かりさうな、商品を注意してゐると、居留地の同じ支那商人の筆

墨店で南京花火が、偶と此の鋭眼に映つた。コリヤ面白い金儲けの材料と直感したので、氏は早速其支那人と、一手販賣の契約を締結したのであつた。

當時南京花火は京濱殊に東京には頗る珍らしかつたので、氏は東京の筆墨問屋へ唐墨を賣込む爲め上京した機會を利用し、市中の玩具店へ南京花火を持ち込んだ所が、果して歡迎を受け、諸方から多大の注文を得て、三割位の純益あり、少からざる金を握つたのであつた。

商機に敏なる氏は、同じ支那人の店に之れも其頃珍らしかつた肉桂を發見し、南京花火と一所に東京の玩具屋へ賣り込んで、金を儲けたのである。

約束嚴守で問屋から信用

其頃日本橋大傳馬町に岩出商店と稱する、有名な筆墨問屋があつた。氏は其問屋と取引して、其主人から非常な信用を獲て、軈て其れが開運の動機ともなつたのである。

氏は岩出商店に取引した初めは、僅か十五圓程であつたが、其れが二十圓になり、五十圓と成つたが、現金取引であつた。所が若い身空で、煙草も吹かさず、酒も飲まず、律氣一方に眞黑氣になつて奮闘して居る樣子を眺めて、岩出商店の隱居は、感心だと言つて、毎日勘定にして呉れた。

所が其約束の晦日になると、勘定は必らず支拂つた。勘定を一錢殘らず綺麗に支拂つた後に、懷中空乏を告げ、止むなく汽車賃を一時借りして横濱へ歸つたことなど度々あつた。

かうした氏の律義振りを觀て、岩出の隱居は益々感服して、大層氏を贔屓にし、何に呉れとなく便宜を計つて、其大成を助け同時に種々商略に關して、自分の體驗を、話して戒めたりした。

同一商品を他店よりは五分位安く賣つたと云ふのが、氏が後日成功した重大な原因の一となつて居るが、其秘訣を會得したのは岩出の隱居の訓言に負ふ所が多い。岩出の隱居は氏に向つて、得意を擴める場合に當つては、原價まで負けてやつても宜い。其れで自分は儲けず、先方が假りに一割儲けることになれば其れを德とし、將來同じ商品を買ふなら、其店から買ふことにするのが人情であり、其結果其店は繁昌するに至るものだと、かう言つて居つた。さうして氏は深く其訓言に感銘し、爾來努めて優良品を他よりは、割安に賣つて販路を擴張したのであつた。

時代を看取して轉業

相變らず注意深き眼を以て將來發展の見込み大なる、珍らしい商品を搜しつゝあつた氏は、其頃實に珍らしかつたゴム風船を、居留地の佛國マヤー商館の店頭に於て發見した。其れを一見するや、氏は恰も電氣にでも打たれたるが如く感じ、直に一手販賣の特約を爲したのであつた。さうして此ゴム風船こそ、店運が急激な勢を以て、大發展した原動力であつた。

筆墨商店の發展力狹少にして、風船ゴム商賣の時代的伸張力の多大なることを感知した氏は、直に商品を携帶して上京し、市中の玩具商店を歷訪して、見本を見せて廻つた。さうして何れの玩具店からも、多大の注文を得た。其れは明治廿四年であつた。

何しろ、其頃に於ては、ゴム風船は市中に於て頗る珍とせられた時代であつたから、需要熾盛にして、恰も羽の生えたる如く賣れ行いた。其れで日々一度の上京では足りず、一日に横濱東京間を數回往復しては、烈しい注文に應ずると云つた繁昌振りであつた。且つ又其純益は三割からあつた。

かうした形勢を觀破して氏は、愈々多年經營して居た、古い筆墨商賣から多望なる新らしき、ゴム風船商賣に全然轉換するに至つた。

不撓不屈店運發展

斯くてゴム風船の需要は月を追ふて益々增加し、爲めに氏は少なからざる金を儲けたが、一日氏熟ら思ふやう、輸入品のみ販賣して居つては、空しく海外に正貨を流出するのみである。內地で之れを製造すれば、少くも其工賃だけは日本の儲けになる譯であると、かう考へて、氏は大阪の福森と云ふ人と、共同で製造專賣權を獲たのを幸に、東京向島で輸入の原料ゴムを材料とし、ゴム風船の製造を試みたが、經驗なき新事業とて、最初一ヶ年程は失敗に次ぐに失敗を重ね、爲めに二千圓程の金を損失したのであつた。

不撓不屈の氏は、一難を經る每に一倍し來る勇氣を揮つて、何十百回の試驗研究を經て、漸く舶來品に劣らない優良品を完成し、是を舶來品の半額にて、市場に大々的に供給し得たのであつた。

斯くて愈々前途に於て光明を認めたので、明治四十年に日本橋馬喰町二丁目十四番地に販賣所を設け、全國各地に向つて製品を供給し、當時一ヶ年の賣上高は二十四萬圓に上るに至つた。

更に進んで支那南洋に向つて製品を輸出し、次で歐洲大戰中に於ては持越せる多額の原料品の暴騰に依つて、一擧して大金を儲け、大正四年神田岩本町一番地の現支店所在地に支店を移轉し、之れより先き、明治廿九年に横濱本町六丁目の間口四間半の場所に本店を移し、次で三十六年同所に壯麗なる大店舗を新築し、店運旭日昇天の勢ひを以て發展し、震災直前には一ヶ年の賣上高百五十萬圓の多額に達し、資金四百萬圓を算し、押しも押されもせぬ日本一の大ゴム商店主とまで發展出世するに至つた。而して氏が裸一貫から大商店主にまで成功するに至つた原因を遡り考究するに(一)、常に新奇なる珍らしき商品を撰擇せる事(二)、約束を嚴守する事(三)、優良品を五分位割安に供給せる事(四)、早起晩退人より多く奮鬪せる事等其主なるものである。

氏は一年三百六十五日每朝五時には床を離れ、自ら先頭に起つて奮鬪の活ける模範を示して居る。其れであるから店內には常に活氣橫溢し、店主の氏は日々橫濱の本店と東京の支店とを掛け持ちに、

今尚ほ眼まぐるしい奮闘を爲しつゝある。

赤手空拳を揮つて、大商店主とならんとする世の、實業青年は深く鑑むべきである。

——終——

不許複製

昭和五年十一月廿五日印刷
昭和五年十一月三十日發行

市井奮闘傳

定價 壹圓貳拾錢

編者 實業之日本社編輯局
發行者 東京市京橋區銀座西一丁目三番地 增田義一
印刷者 東京市芝區愛宕町三丁目二十二番地 笠間音次
發行所 東京市京橋區銀座西一丁目三番地 實業之日本社
振替 東京三二六番
電話京橋五一二一番—七番
東洋印刷株式會社印刷

實業之日本社編の好著

市井奮闘傳の姉妹篇

財界巨頭傳

最新刊

定價 壹圓五拾錢
郵税 八錢

赤手空拳なるを嘆ずるを止めよ。彼等斯くの如くにして成功せり。

——内容の名士——

森廣藏氏　石井健吾氏　武智直道氏
郷誠之助氏　井坂孝氏　菊地慶三氏
牧田環氏　中川末吉氏　有賀長文氏
川西清兵衛氏　米山梅吉氏　堀啓次郎氏
岩井勝次郎氏　土方久徴氏　鈴木恒三郎氏
荻野元太郎氏　阿部房次郎氏　横山信毅氏
加藤敬三郎氏　村井保固氏　鈴木吉氏
他二十數名

獨立經營最初の

一萬圓儲けるまで　十三版　定價壹圓七拾錢　郵税八錢

奮闘活歴

裸一貫から　三十三版　定價壹圓七拾錢　郵税十錢

奮闘活歴

血涙のあと　四版　定價壹圓七拾錢　郵税八錢

實業之日本社編の好著

衆議院議員　實業之日本社長　増田義一著

運命の打開

最新刊

定價壹圓
郵税八錢

本書は運命打開のために、如何に努力し奮闘すべきかを、諸方面より説いたものである。打開の道は固より理論のみを以てしては盡されぬ。故に古今東西の實例に重きを置き、運命打開者の體驗を示してその方法の實際を知る事に努めた。若し讀者諸君が本書によつて、その呼吸を呑み込み、逆運を征服すると共に、よく幸運を捉へる事が出來たならば望外の幸ひである。

處世新道	七版	定價壹圓五拾錢 送料十錢
青年出世訓	十三版	定價壹圓 送料十錢
青年と修養	八十三版	定價壹圓五拾錢 送料六錢
立身の基礎	三十三版	定價壹圓拾錢 送料十錢
思想善導の基準	二十四版	定價壹圓五拾錢 送料八錢
大國民の根柢	十八版	定價壹圓八拾錢 送料十錢

萬雷の拍手に迎へられて出てたる新刊書

姙娠調節の醫學的知識

最新刊　醫學博士　堤　辰郎氏著　定價　壹圓五拾錢　郵稅八錢

モダン用語辭典

最新刊　早大教授　喜多壯一郎氏監修　定價　壹圓貳拾錢　郵稅八錢

口語六法（民法篇）

最新刊　法學博士　吾孫子勝氏　法學士　水谷幸二郎氏共著　定價　壹圓八拾錢　郵稅十錢

肺病全治法廿五則

最新刊　醫學博士　矢部專之助氏　定價　壹圓五拾錢　郵稅八錢

煽動大煽動（歐亞を舞臺の軍事小說）

最新刊　文壇の新人　小山勝清氏著　定價　壹圓貳拾錢　郵稅八錢

西式强健術と觸手療法

百七十版　東京市技師　西勝造氏著　定價　壹圓　郵稅四錢

會社の組織と經營

好評五版

經濟學士　山口丈雄氏著

これ一册あれば會社を創るにも營むにも困らぬ

内容略目

△會社を潰すには
△會社を減資するには
△會社のボロを隱すには
△合名を合資にするには
△會社のボロを發くには
△合資を株式にするには
△個人經營を會社にするには
△會社を設立するには
△株主總會を開くには
△會社を解散するには
△重役を選擧するには
△會社を合併するには
△重役を放逐するには
△會社を買收するには
△會社を增資するには

定價2圓50錢　郵稅10錢

財界物語

忽再版

時事新報經濟記者　西野喜與作氏著

難しい財政問題も一讀忽ち面白く氷解する

財政と云へば堅苦しいが、物は說明の仕方一つで堅くもなれば軟かにもなる。著者は新聞の經濟部で苦勞した人だけに堅苦しく說くことが大嫌ひだ。財政全般に涉る諸問題を「講談本の如く面白く、教科書の如く有益に、新聞紙の如く新しく」取扱つてゐるから、自然と惹き入れられて、肩が凝らずに讀ませる。それで複雜な財政の知識が正確に組織的に、頭腦に入つて來る仕組である。

定價2圓　郵稅10錢

手形の書方と見方

忽再版

一字も忽せにできぬ諸手形の注意を述ぶ

辯護士　宮崎直二氏著

内容一班

爲替手形　記名式手形　約束手形　無記名式手形　小切手　切手形　指圖式手形　持參人手形　拂戻手定日拂手形　線引一覽拂小切手　先日附荷爲替手形　融通手形　割引手形　求權國際手形　支拂請求權　受取人拒絕支拂人　人形延期手形　擔保形　償還請求權　受振出人　裏書人　書方　約束手形の書き方　手形の書き方　小切手の說明　切手の書き方　人形の書き方　引替受人　參加引受人　拂戻日拂一覽拂　記名式　無記名　切手形　指圖式　持參人　爲替手形　記名式手形　約束手形　手形　切手　小切手　切手形　指圖式　持參人　手形

定價1圓50錢　郵稅8錢

東京朝日新聞記者　石川六郎氏著

商業實務

出世外交術

十五版　定價壹圓五拾錢　郵税六錢

—(目次容内)—

外交の心得＝相手を利用する事—外交員の諸條件—社交法—談話術—話し上手と聞き上手—お世辭の使ひ方—人に對する態度—恐縮の態度—婦人に對する態度—婦人の外交と服裝—外交術の大意—會見する迄—第一關門突破術—婦人訪問の場合—玄關子—天性よりも修練—新入社の心得—外交と學問—外交と膽力—婦人外交の呼吸—應用外交術—貯金外交術—收入と手腕—保險外交術—實例—根氣と成功—印刷外交術—販賣外交術—豫約物勸誘—店員外交術—お客の人物を見別ける法—外交成功者の實例—外交逸話—婦人外交溝口女史

外交員として活躍せんとする人の寶典

この方法によつて無産者は樂に暮せる

現代サラリーマン階級くらゐ生活不安に惱むものはあるまい。從つて、誰も彼も生活を安定させようと、物狂はしいまでに懸命になつてゐるが、利殖法に通曉したものばかりは無い。それに人々は各々本職がある。本書は勤勞階級者のために、親切な案内者となつて、百五十圓か二百圓の資本金あれば坐つてゐて貯金や公債などより利廻りよく、確實に、增殖できる祕訣を說かうとするのだ。小金が蓄つたら、何はさて置き本書へ相談せられよ。

サラリーマンの生活戰術

十二版　定價壹圓貳拾錢　郵税六錢

玉塚旬報主任　長井修吉氏著

滾々泉の如き隨筆の金字塔

高所より觀る　忽十版　永田秀次郎氏著　定價一圓二十錢　送料八錢

巴里の横顔　廿五版　藤田嗣治畫伯著　定價一圓五十錢　送料八錢

東西相觸れて　十五版　新渡戸稻造氏著　定價二圓　送料十二錢

素顔のハリウッド　五版　上山草人氏著　定價一圓五十錢　送料八錢

敢然頂角を往く　八版　二荒芳德氏著　定價一圓五十錢　送料八錢

無憂華　大好評二百六十二版　九條武子夫人著　定價二圓　送料十錢

良寛さま　十版　相馬御風氏著　定價一圓五十錢　送料八錢

茶前茶後　八版　增田義一著　定價一圓　送料四錢

2577

現代の自助論ここに在り

如何にして希望を達すべきか　五十七版　國際勞働會議政府代表　上谷續氏譯　定價一圓七十錢　送料十錢

如何にして一身の方向を定むべきか　卅五版　國際勞働會議政府代表　上谷續氏譯　定價二圓　送料十錢

如何にして自己を大成すべきか　十三版　國際勞働會議政府代表　上谷續氏譯　定價一圓七十錢　送料十錢

如何にせば運命を支配し得るか　十二版　谷口雅春氏　定價二圓　送料十錢

世渡りの道　九十版　農學士　新渡戸稻造氏著　定價一圓五十錢　送料六錢

新會社員學　忽五版　ドクトルオブフキロソフキー　伊藤重治郎氏著　定價一圓五十錢　送料八錢

勝利への道　四版　法學博士　浮田和民氏著　定價一圓七十錢　送料八錢

度胸の据ゑ方　再版　大僧正　道重信教師著　定價一圓五十錢　送料六錢

Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

inches 1 2 3 4 5 6 7 8

cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black